財団法人 日本ハンドボール協会編　平成22年12月1日発行(毎月1回1日発行)　通巻515号　昭和40年6月7日第3種郵便物認可

ハンドボール

12
DEC.2010・No.515



特集

第65回国民体育大会

[表紙写真：第65回国民体育大会少年男子の部優勝の山口県・久保二千笑選手：写真提供 スポーツイベント社]

財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.jp/



全日本社会人ハンドボール連盟設立を契機に



(財) 日本ハンドボール協会常務理事　**江成 元伸**

平成22年4月、全日本社会人ハンドボール連盟（以下、社会人連盟という）は下記の事項を目的として設立されました。(1) 全日本社会人ハンドボール競技団体を統括し、相互の親睦を図り、技術の向上と社会人ハンドボールの健全な普及発展を目的とする。(2)（財）日本ハンドボール協会の組織団体として緊密な関連を保ち、斯界の興隆に寄与し、国内の各社会人競技団体と連絡を密にし、社会人スポーツの発展を図る。(3) 国内外のハンドボール団体との交流及び国際間の親善を図る。

社会人連盟が発足し、既存の各連盟を除いたすべてのチームを「社会人連盟傘下のクラブ」と位置づけ、社会人連盟の組織を設立・編成し、各登録区分・各大会の運営を連携させて組織を編成します。

社会人連盟内における組織は、大会別に編成する計画をしています。**「社会人委員会」**は、平成22年度中に実連を発展的解消して組織名変更をお願いすることとし、社会人選手権（現実業団選手権）の出場チームの活動及び大会組織を統轄します。**「ジャパンオープン委員会」**は、ジャパンオープン選手権大会の出場チームの活動及び大会組織を統轄します。委員会構成メンバーは、今年ジャパンオープンを開催した山口県協会、今後ジャパンオープンを開催する各協会とします。**「クラブ委員会」**は全国クラブ選手権大会・東地区大会、西地区大会の出場チームの活動及び大会組織を統轄します。委員会構成メンバーは、東地区開催地の福島県協会、西地区大会（過去は持ち回り開催）を今年開催した協会、今後西地区大会を開催する予定の各府県協会とします。**「都道府県委員会」**は、各都道府県で開催されている「リージョナル」区分の大会（名称は各都道府県で不統一）に出場チームの活動及び大会組織の代表者とします。

平成23年度のハンドボール活動の今までとの違いは、登録区分が変わることだけです。社会人連盟という設定が増えるだけで、基本的には今年度と変わりません。登録金も社会人連盟が設立したことによる値上げは考えておらず、将来的にも、従来の登録金の中での組換えで対応していきたいと考えています。

今回の社会人連盟設立の大きな狙いは従来組織として一本化されていなかった、いわゆる「クラブチーム」の再編成にあります。現在の実連のチームもリージョナルのチームも同じ「クラブ」の位置づけと整理します。この連盟設立により小学生、中学生チームを除き、日本協会に登録しているすべてのチームは、加盟団体である各都道府県協会及び連盟に所属することになりました。今後は社会人連盟の各委員会の機能的活動内容等を充実させ、各委員会に所属する大会を盛り上げるための方策を構築していきたいと思っています。

一方、この連盟はあくまでも日本協会に登録しているチーム、選手を統括していますが、現在日本協会の大きな問題となっている登録人口の拡大という命題からすると、全国で日本協会に登録しないで活動している大会、チーム、選手を日本協会に登録していただくように働きかける方策も包含しています。この記事が掲載される機関誌は、本協会に登録しているチームに登録料の一部として配布されています。近年、巻頭言は日本協会のホームページにも配信されています。日本協会に登録されていない方々もこの記事をごらんいただき、状況をご理解いただくとともに、ぜひ日本協会に登録していただき、あらゆる人が「ハンドボール」を私たちのスポーツとして共有していくように働きかけていきたいと考えています。

ご承知の通り、日本協会は私たちの楽しみとしての「ハンドボール」を広めようとする「普及」、より強くそして世界の頂点をめざそうとする「強化」を二大車輪として事業を行っています。普及という意味からは選手第一と考え、大会をひとつでも多く、試合数をひとつでも多く設定したいと考えています。また、強化という意味からは楽しみの試合・大会から少しでも強くなりたいという試合・大会への発展も考えています。現在10万人を超えたハンドボール人口を20万人、30万人へと拡大していくためにも、多くの方々のご理解を得まして、社会人連盟が発展するようご支援、ご協力をお願いいたします。

ゆめ半島千葉国体

第65回 国民体育大会 ハンドボール競技



【最終結果】

種別	優勝	2位	3位	4位	5　位
成年男子	愛知県	埼玉県	佐賀県	広島県	茨城県、岩手県、千葉県、福井県
成年女子	熊本県	広島県	石川県	大阪府	京都府、東京都、茨城県、千葉県
少年男子	山口県	福井県	香川県	大分県	愛知県、岩手県、神奈川県、千葉県
少年女子	愛知県	京都府	大阪府	山口県	千葉県、岐阜県、東京都、香川県

【総評】大会を振り返って

千葉県ハンドボール協会理事長　内記 英夫

第65回ゆめ半島千葉国体ハンドボール競技が9月29日の諸会議・オープニングセレモニーを皮切りに、競技は30日から10月4日までの5日間、市川市・香取市の6会場で開催され、無事大会を終了いたしましたことをご報告いたします。千葉県では昭和48年に佐原市（現：香取市）で開催した「若潮国体」以来、37年ぶりの開催となりました。

平成17年に「きらめき総体」を香取市で男子の部、市川市で女子の部を開催し、国体も両市で2種別ずつ実施する予定でしたが、平成18年3月に佐原市が1市3町で合併し香取市となったため、ハンドボール・ボート・カヌーの3競技を実施することになりました。当初、香取市の現場では3競技実施は無理なので、ハンドボールを返上したらどうかとの意見もあったようですが、千葉県のハンドボールのメッカである佐原でハンドボールをやらないわけにはいかないという宇井・香取市新市長のご決断により、少年男子1種別の実施を決定していただきました。それに伴い市川市に3種別実施を引き受けて頂きましたが、会場が4会場必要となり1会場足りないという事態になり会場探しに奔走したところ、昭和学院より国体開催に間に合うように体育館を新築（本年5月完成）するので使用して欲しいとの申し出をいただきほっといたしました。また、香取市も国体会場として佐原中学校に体育館を新築（本年3月完成）していただきました。両市ともに新築の体育館はもとより、既存の体育館も改修工事を行い、すばらしい競技環境を整備していただきましたことに深く感謝いたしております。

市川市と香取市は約80㎞程度離れておりますが、平成19年度から両市実行委員会と協会による連絡調整会議を月1回のペースで行い、平成21年度からは連絡調整会議に加え、協会から市川市担当者8名、香取市担当者7名と各実行委員会とによる担当者会議をそれぞれ月2回のペースで行い準備を進めてきました。

国体ではたぶん初めてとなる競技会場外で行う開始式に変わるオープニングセレモニーを、両市の意向により合同で代表者会議に先立ち市川市文化会館で行いました。香取市からの選手の輸送と選手の負担を考慮し、各チーム5名以内との人数制限をしたため、全選手・役員に参加していただくことはできませんでしたが、新しい試みであったと思います。

また、両市とも市内に宿泊施設が少ないため、市川市では










6点共　写真提供：スポーツイベント社

ほとんどのチームの宿舎が東京都内となり、香取市に於いても約半数のチームの宿舎が茨城県潮来市となるなど、移動等で大変ご不便をお掛けいたしましたことをお詫びいたします。

市川市・香取市はともに千葉県ではハンドボールの盛んな地域ではありますが、一般市民の認知度はそれほど高くありませんでしたので、両市実行委員会で機会あるごとに啓発活動をしていただき、小学生対象のハンドボール教室も何度か開催していただきました。そのお陰もありまして、今大会5日間で37,968名の一般観客入場者数があり、各試合とも大声援の応援で盛り上げることができました。これをきっかけとして千葉県のハンドボールが更に普及・発展・強化できるように、千葉県ハンドボール協会として努力して参りたいと思います。

開催県としての競技結果は、ここ5年間1種別も入賞していない千葉県としては、全種別5位、男女総合5位、女子総合7位という満足のいく結果を残すことができました。

大会を終え、運営面で選手・役員の皆様にご迷惑をお掛けしたことも多々あったことと思いますが、大会全体としては大成功であったと思っております。これもひとえに、今大会の開催に当たり多大なるご指導とご協力を頂きました日本協会、及び長年にわたり誠心誠意ご準備くださいました市川市・香取市両市実行委員会、大会運営を支えてくださいました関東ハンドボール協会、審判員、競技役員、競技会役員、補助役員、ボランティア及び全ての関係者の皆様のお陰であると深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

最後に来年山口県周南市で開催されます「おいでませ！山口国体」のご成功をご祈念申し上げます。

優勝チームの声

◆成年男子：愛知県

大同特殊鋼ハンドボール部主将　末松　誠

この度は皆さまのご声援とご協力があり、第65回国民体育大会ハンドボール競技で11年ぶりの優勝という最高の結果を残すことができました。これもひとえに皆様方の支えがあっての賜物です。この場をお借りしお礼申し上げます。

私達愛知県選抜は、2年前の大分国体決勝で埼玉県選抜に終始リードしながらも、後半失速しての逆転負け、去年の新潟国体でも決勝で広島県選抜に大敗し、2年連続で決勝で敗れ、悔しい思いをしてきました。その悔しさをバネに日頃の



ハードな練習にも耐え、今回の千葉国体で結果を出そうと優勝の二文字に向かいチーム一丸で臨みました。

優勝を目標に意気込んで臨んだ国体でありましたが、１回戦から思うような試合運びができずに厳しい試合が続きました。しかし、どんなに厳しい戦いが続いても選手全員が自分の役割を徹底し、常にチャレンジャー精神を忘れず、がむしゃらに、泥臭くハンドボールに取組んだことが今回優勝という最高の結果に繋がったと思います。

優勝した瞬間は我を忘れてみんなと抱き合って喜びましたが、表彰式で賞状を頂いてもまだ優勝したという実感が湧いてきませんでした。翌日の新聞の記事を見て、自分達が悲願であった国体優勝を 11 年ぶりに成し遂げたという事が実感できました。

今回の千葉国体を振り返ると若手、中堅、ベテランと選手全員がコートの外でも自分の役割を徹底し、チーム全体が一つになって勝ち取った優勝であると感じています。

これからもハンドボールを通して応援して下さる皆さんに「夢と感動」を共有できるように選手一同頑張って参ります。

今後とも温かいご声援よろしくお願い致します。

◆成年女子：熊本県

熊本県ハンドボール成年女子監督　岡﨑 恭代

今回、輝かしい実績を持つ熊本県成年女子チームの監督をさせていただきました岡崎恭代と申します。私はハンドボールの経験は全くないのですが、1997 年の男子世界選手権、1999 年のくまもと未来国体、2000 年のシドニーオリンピックアジア予選とビッグイベントが本県で開催され多忙を極める中、当時、理事長であった井手和洋先生から「事務局の電話番をしてほしい」とお声掛けいただいたのが、今日のこの貴重な経験のきっかけとなりました。

そのお声掛けいただいたご縁が、娘が小学校からハンドボールを始め、中学校までプレーし、進学した高校では部がなかったため、マネージャーを務めさせていただいていた高校（熊本工業高校）の監督が当時の県協会事務局長でのちの理事長をお務めになった葦原大三先生だったからです。このお二人には、単なる「娘のハンドボールの追っかけママ」を熊本県ハンドボール協会のお手伝いをさせていただき、今回のようなすばらしいチームの監督をさせていただくきっかけを作っていただいた事に心から感謝しております。

少々、前置きが長くなりましたが、監督とはいえ、実際にはオムロンチームの黄ヘッドコーチがおられますので、私は応援団長として、ベンチから選手へ熱い応援をさせていただいただけなのですが、今年度はベテランの選手が抜け、久野キャプテンを中心にスタートを切った新生オムロンが試行錯誤しながら体制を整え、千葉国体で見事優勝の栄に浴するまでには、紆余曲折がありました。

まず、よりによって、九州ブロック大会の１回戦の相手が、本国体の決勝といってもおかしくない鹿児島県だったのです。その１回戦で後半に一時６点をリードされた劣勢から鹿児島県を打破した後の選手達の涙を見たとき、「本当に勝ちたかった！」という強い意志を感じ取ることができました。また、今回のブロック予選では絶対に負けることができない熊本県ハンドボール協会としての特別な理由もあったのでした。というのも、今回の千葉国体の熊本県選手団の団長が熊本県ハンドボール協会の島田俊郎会長であること、本県ハンドボール界の生み親藤田八郎先生が現在、お住まい地が千葉県だったのです。その千葉国体では絶対に優勝しなければならないという強い重圧がありました。

そのような強い思いを持って臨んだ本国体では、ミーティングでの黄ヘッドコーチの「僕たちは勝ちに飢えている。勝ちたいんだ！」という言葉を受けて、選手たちも、準決勝・決勝と苦しい試合展開ながらも、全員で声を掛け合い最後の１秒まで諦めない気力がチーム全体にありました。そしてチームの状態は決してベストではなかったと思うのですが、



個々の力不足をみんなでカバーできる選手同士の絆の強さがあり、ベンチ入りした12人の選手だけの力でなく、メンバーから外れた8人の大きな力がそこに存在していたからこそできた優勝ではなかったかと思います。たとえ、実力が同等であったとしても、最後に勝ちをもぎとるのは、「是が非でも勝ちたいという気持ちの強さ」なんだと心から感動しました。今回の優勝チームはまだまだ発展途上の段階にあり、本大会での優勝を糧に、きっとこれからの日本リーグや全日本総合でも素晴らしい試合を見せてくれるものと期待しております。

最後になりましたが、私に監督という重責を経験させていただきました、熊本県ハンドボール協会の関係の皆様方や快く受け入れたくださったオムロンチームの多田幸一ゼネラルマネージャーをはじめ、西窪勝広ゼネラルマネジャー代行、黄ヘッドコーチ、そして20名の選手の皆さんに心より感謝申し上げ、優勝の報告とさせていただきます。

◆少年男子：山口県

山口県ハンドボール少年男子監督　倉谷 康彦

この度、第65回ゆめ半島千葉国体におきまして、山口県勢としては18年ぶり10回目の優勝を果たすことができました。これも日頃よりご支援とご協力をいただいております県体育協会、県高体連、市ハンドボール協会、学校関係者、保護者の皆様そして子供たちをハンドボールの世界へと導き、愛情を持って育成していただいた小・中学校の指導者の方々のお陰でありますことを心からお礼申し上げます。

彼らは中学時代のジュニアオリンピックカップで全国優勝を果たし、「高校でも日本一を」という大きな夢を抱いて入学してきた選手達です。中には片道1時間半以上もかけて通学し、帰宅時間が時には夜中を過ぎる子もいますが、志の高い選手ばかりで、決して手を抜くことなく日々の練習を大切にしてくれました。

しかし、そんな私達に「全国の壁」は常に大きく・分厚い



物でした。身長が180㎝を越える選手は一人もおらず、県内でも一番小柄なチーム編成でした。昨年の新潟国体2位、全国選抜3位、沖縄インターハイ3位と何度も何度も「全国の壁」に跳ね返されました。「私が監督をしてなければ…」「高校ではこのサイズでは一等賞にはなれないのか？」そんな思いも頭に浮かんできました。インターハイも終わり、下松工業の選手を加え本格的に国体への練習を開始しましたが、そんな矢先、センタープレイヤーの足首の骨折、右45度プレイヤーが貧血症状を発症するなど山口県選抜のチーム作りも思うに任せない状態でした。

千葉へ出発する前夜、一人娘がかけてくれた「父さんが負けるとこは見たくないけんね。諦めんさんなよ」という言葉を胸に、私はこの選手達との最後の全国大会に臨みました。香取市佐原に入り、大会役員やボランティアの方々の本当に暖かいご声援やおもてなしを受け、次第に選手も私も「一日でも長くこの場所で、このメンバーでハンドがしたい。」という純粋な気持ちになっていきました。佐原の皆様方には感謝の気持ちで一杯です。

私にとって、やっとたどり着けた悲願の日本一でした。その夜いただいた全国のたくさんの指導者の方々からのお祝いのお言葉は私の一生の宝です。本当にありがとうございました。

◆少年女子：愛知県

愛知県ハンドボール少年女子監督　**浅野 清隆**

この度、第65回国民体育大会において、優勝することができ大変嬉しく思っています。これもひとえに、ご支援、ご協力をいただいた愛知県ハンドボール協会関係者の方々、学校関係者の方々、保護者の方々、愛知県の先生方のおかげであると深く感謝しております。

今年のチームはずばぬけた選手はいませんが、全体的に個々の能力は高く結成初日に「かみあえば日本一になれる」と言ってスタートしました。ただ愛知県は毎年、複数の学校からの選抜チームであり、今年度も5校からの選抜であったので、プレースタイル、戦術等まったく違うチームの選手達を2ケ月弱の期間で果たして、ひとつにまとめることができるのかという不安はありました。しかし、それも平日の練習で基本的な約束事を確認し、土日に練習ゲームを行い実戦の中で再確認をすることを繰り返すことで、徐々に解消していきました。また、チーム全員が非常に仲が良く、チーム間でのコミュニケーションが多くとれたことも大きかったと思います。

ただそれでも2ヵ月弱という期間は短く、直前の練習やゲームの中でも約束事が徹底されなかったり、まだやり残したことがある状態で、1回戦の石川県との試合を迎えました。

その試合ではやはり不安が的中し、石川県のペースで進む展開で非常に苦しい戦いとなりました。しかし、残り3分で追いつき、30秒で逆転して勝ったことにより、チームに自信と勢いが生まれ、それは、後半に速攻でつきはなした東京都との2回戦、延長の後、7mTコンテストの末、勝利した大阪府との準決勝と勝ち進むにつれ大きくなっていきました。そして、京都府との決勝戦ではまさに100点満点とも言える内容のゲームができ、優勝という最高の形で大会を終えることができました。

最後になりましたが、大会運営に尽力されました多くの関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



写真提供：スポーツイベント社

戦　評

【成年男子】

▼3位決定戦

佐賀県　28（11－12、17－13）25　広島県

両チームともフリースローエリア内を固めるディフェンスで3分過ぎ広島県が1点目を決めるも、ロングやミドルシュートの打ち合いを繰り広げなかなか点が入らない。10分過ぎ、ようやく動きが激しくなり、広島県は4番、11番を中心に、佐賀県は7番、4番を中心に得点を重ね、シーソーゲームのまま12対11と広島県のリードで折り返す。

後半、佐賀県は激しいボールチェックによるインターセプトで3点を連続ゴール、その後も激しいチェックにより速攻での得点を重ね、15分には22対15と大きく引き離した。20分過ぎに佐賀県の連続シュートミスをきっかけに広島県が反撃、激しいディフェンスの中、なかなか得点につながらない佐賀県に対しロング、サイドと多彩なシュートで得点を重ねた。この勢いで押し切るも、スタートの佐賀県のリードを埋めることが出来ず、28対25で佐賀県が勝利を手にした。

▼決勝

愛知県　30（15－15、15－14）29　埼玉県

前半が埼玉県のリードで後半が愛知県のペースと緊迫した四つ相撲の決勝戦となったが、負傷中断が相次ぐ激しい試合を最後は愛知県が総合力で制した。

愛知県は3人がフリースローラインの外に出る3－2－1ディフェンスで、埼玉県は6　0から相手の2番・野村にマークを厳しくする戦法で、5分までは2対2。7分20秒、得点された後のクイックスタートで埼玉県3番・小澤が得点を返すと埼玉県に勢いが出て、その後4連続得点をあげて主導権を握る。11分27秒に愛知県はタイムアウトで相手のペースを絶つと2番・野村のロングシュートが決まって白熱した展開となった。前半の終盤に愛知県4番・末松のカットインシュートが相次ぎ、15対15のイーブンで折り返した。

後半は早い帰陣で埼玉県のクイックスタートを封じた愛知県が埼玉県7番・石川のロングシュートなどを許したものの攻守のリズム良く次第にペースを自分達のものとし、19分には26対21と5点差まで広げた。埼玉県は中盤で組織的な攻撃を見失いシュートミスが目立ったが、終盤ではプレス気味ディフェンスに切り換えて得意の速攻が出はじめ、終了前の5分間には4連続得点をあげて1点差まで迫った。しかし、残り10秒で得たノーマークをGKの阻止に合い万事が休した。

【成年女子】

▼3位決定戦

石川県　31（19－13、12－12）25　大阪府

石川県が立ち上がりリードを保ち終始ゲームを支配した。大阪府のパワーあるプレーをスピードで封じ、大阪府に十分なプレーをさせずに振り切った。

試合開始直後に石川県・上町のポストシュート、ステップシュートでリズムをつかみ、その後も野路、佐久川らの速攻、カットインシュートで着々と加点し、10分には9対3とリードした。大阪府は石田の速攻により4連続得点で3点差まで追いすがったが、石川県の堅いディフェンスを崩せず、6点差で折り返した。

後半に入って、大阪府は中盤に乾のサイドシュートで3点差、終盤にまた岡本のミドルシュート等で4点差まで追いすがり会場を盛り上げたが、石川県に振り切られた。大阪府は実力のある石川県に対し果敢に攻め、ゴールキーパー上山の好捕も光り、その善戦と健闘ぶりは称賛に値する。

▼決勝

熊本県　19（10－10、9－8）18　広島県

互いに堅い守りでなかなか相手に得点を与えない好ゲームとなったこの試合は、終盤、2本の速攻をものにした熊本県が1点差で広島県を振り切り2年連続20回目の優勝で偉業を成し遂げた。

前半は厳しいディフェンスから速い攻撃をしかける熊本県が2番・藤井、8番・石立などのロングシュートやカットインで得点するのに対して広島県は6番・植垣のブラインドシュート、3番・村山の切れ味鋭いカットインプレーで加点した。両ゴールキーパーの好セーブもあり、10対10の同点で折り返した。

後半も同様の展開となったが、広島県は８番・菅野の３得点などで残り 10 分で 18 対 16 と２点リードした。熊本県はここで広島県に退場者が出たところで速攻で１点を返した。残り４分を切ったところで熊本県は速攻から４番・高田がサイドシュートを決めて同点。更に厳しいディフェンスでカットから残り 30 秒で再び４番・高田の速攻で１点リード。広島県はタイムアウトをとり、最後の攻撃をしかけシュートをねらったが得点できなかった。トップチーム同士の激しい攻防で見応えのある好ゲームであった。

【少年男子】

▼３位決定戦

香川県　31（16 − 12、15 − 11）23　大分県

速攻カットインを主体とする香川、ロング・ミドルを武器とする大分との３位決定戦は、開始 20 秒、香川７番内海のカットインでゲームが動きはじめる。５分には香川の速い攻撃で４対０とリードする。その後も両チームとも激しい攻防を続けるが、大分はいまひとつボールが手につかない。その隙に、香川は着実に加点し、13 分７対２とリードを広げる。対する大分は 20 分過ぎに本来の持ち味をとり戻し、１点差まで詰め寄る。香川はタイムアウトをとりディフェンスをたてなおし、速攻等で得点を重ね、４点リードで折り返す。

後半、香川は５－１ディフェンスに切り換え、大分のセットオフェンスを封じ、速攻で４連取。波に乗る香川は、キレのあるプレーで次々と加点。試合を有利に進めた香川が 31 対 23 で勝利した。

▼決勝

山口県　36（15 − 9、21 − 16）25　福井県

福井県のシュートを山口県のキーパー田村が連続セーブ、福井県の大事なところでのミスもあって、前半のリードを後半も広げた山口県が優勝を果たした。

前半、両チーム堅さが見られる様子の中から、山口県３番・久保の先取点。福井県は山口県キーパーに阻まれながらも中盤には同点とするが、大事なところでのミスもあり、点差をつけられ 15 対９と６点リードされ折り返した。

後半に入って福井県は山口県３番・久保、５番・田中にマンツーマンディフェンスをつけるが、山口県も福井県 10 番・平子にもマンツーマンディフェンスをつけるなど、対抗しながらも点差は徐々に広がった。

福井県は大切なところでのミスが続き、最後まで自分達のペースに戻せず準優勝に甘んじた。

【少年女子】

▼３位決定戦

大阪府　25（15 − 14、10 − 8）22　山口県

大阪府のスローオフで試合開始。山口県は積極的にカットを狙う３　２　１ディフェンス。大阪府は６－０ディフェンスで互いにフットワークの良い守りで引き締まった試合展開となり、15 対 14、大阪府１点リードで前半を終了した。

後半も互いに持ち味を出した攻防を続け、着実に加点し、白熱したゲームとなった。13 分過ぎに大阪府のゴールキーパー 12 番白石が山口県の 7mT を阻止してから、攻守ともリズムが良くなり、徐々に差を広げた。山口県は追い上げようとした時に退場者が出て、追いつくことができず敗退した。

▼決勝

愛知県　28（13 − 9、15 − 8）17　京都府

試合開始より愛知県のスピードに京都府のディフェンス陣が対応できず、失点を重ねた。後半に入っても愛知県のペースで大量点を奪い京都府を押し切った。

開始５分間に愛知県は速攻、ミドルシュートと４連続得点でペースをつかんだ。京都府は６分に笠原のシュートフェイント、７分に７ｍスローで返したが、リズムを奪えず愛知県の近藤の速攻、加藤のポストシュートで加点を許した。愛知県・岡田のコート全体を見たパスワーク、ゴールキーパー望月の絶妙な球出しによる速攻や好セーブでゲームを支配し４点リードで折り返した。

後半に入り追い上げるべき京都府は 10 分間得点できず、逆に愛知県は新保、鈴木のカットインシュートに加え、ゴールキーパー望月の球出しがますます冴え、大量リードで優勝を手にした。

京都府は愛知県のディフェンスを崩せず、悔しい敗戦であった。得点差こそついたものの、ファイナルゲームにふさわしく内容の濃い見応えのある好ゲームであった。

第18回 日・韓・中ジュニア交流競技会

――ハンドボール競技



男子	日本	韓国	中国	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
1位 日　本		25○23	36○18	2	2-0-0	61	41	20	4
2位 韓　国	23●25		34○26	2	1-0-1	57	51	6	2
3位 中　国	18●36	26●34		2	0-0-2	44	70	-26	0

女子	韓国	日本	中国	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
1位 韓　国		28○18	28○20	2	2-0-0	56	38	18	4
2位 日　本	18●28		31○25	2	1-0-1	49	53	-4	2
3位 中　国	20●28	25●31		2	0-0-2	45	59	-14	0

交流を振り返り

(財) 全国高体連ハンドボール専門部部長　塩谷 和雄（神奈川県立相模原高等学校長）

8月23日（月）～29日（日）の7日間、中国・河南省鄭州市において標記競技会が開催され、日本選手団11種目242名が参加。ハンドボール競技は鄭州大学体育館で行われ、日本の男女精鋭28名が韓国・中国との切磋琢磨に挑み、価値ある1週間を終えることができました。

河南省の省都である鄭州市は、人口716万人、面積7446.2平方キロメートルの大都市で、北には黄河、西には少林寺で有名な嵩山があり、東西南北をつなぐ交通の要所でもあります。宿舎の黄河迎賓館と体育館を往復するバスから見える人と車、クラクションの音、戦いを終え帰国を控えた選手たちが、黄河を見下ろす巨大な塑像「炎黄二帝」の前で、名残惜しそうにはしゃいでいる姿などが印象的でした。中国の伝統芸術の凄さに圧倒された開会式から始まり、少林寺見学で幕を閉じた今回の国際交流事業が、ハンドボール技能の習熟は勿論のこと、参加した選手一人ひとりの「学び」と「育ち」につながったものと確信しています。

競技の様子については、男女監督及び選手が後述しますが、短期速成チームゆえ、攻防共にメンバーの見極め・組み合わせの最適化、コンビネーションの精度などが課題となりましたが、総じて、本国選手は体力・技術共に優れた個人技能を発揮できたものと評価しています。

選抜チームはその名の通り、全国から選りすぐった個性豊かな人材の集合体。選手一人ひとりが高いプライドを有している一方、リーダーやチームメイトとのコミュニケーションなどに不安感を抱きながら、練習やゲームに臨み共同生活を営むことになります。そうした意味から、監督・コーチが一体となって、短期間でコンビネーションづくりに努め、チームで戦うことの大切さを指導していただいたことに、団長として敬意を表するとともに、選手の皆さんに深く感謝しています。

おわりに、選手の派遣に際してご尽力いただいた（財）日本ハンドボール協会はじめ各校の校長先生並びに監督、保護者、関係機関の皆様、事前合宿等でお世話になったNTC、佼成学園、各大学関係者の皆々様に心より御礼を申し上げ、ご報告といたします。なお、平成23年度は日本（愛知県）開催となります。

参加選手・監督の声

男　子

男子監督　國府　功
（（財）全国高体連ハンドボール専門部副委員長）

「熱烈歓迎」と書かれた横断幕が並ぶ中、第18回日・韓・中ジュニア交流競技会は中国・河南省鄭州市で開催された。参加チームは、例年であれば地元代表を加えた4チームでの開催であるが、鄭州選抜の姿はなく3カ国3チームによる大会となった。スポーツ交流による相互理解と競技力向上を目的としての競技会であるが、スタッフを含め選手もめざすはもちろん優勝、4連覇である。

今年は、国体ブロック予選がほとんどの地区で8月20日～8月22日までの日程で行われたため22日の集合日までゲームという選手もおり、慌ただしい中での大阪集合であった。そのため例年行ってきた直前合宿はできず、8月11日から13日まで味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて事前合宿を実施した。昨年同様に大学生の胸を借り、本番さながらの激しい当たりを体験して本大会に臨む予定であった。しかし、インターハイの疲れや国体予選前の合宿などで疲れがピークを迎えていたのか、大学生相手の士気のあがらない練習ゲームが続き、大学の監督からも心配の意味での叱咤激励を受けるとともにこれからの日本代表になるであろう選手へのはがゆさが感じられた。

心配が現実にならないように即席チームの一番の弱点である選手同士のコミュニケーション不足を補うためにも声を出すことの大切さを選手に呼び掛けた。中国での韓国戦・中国戦に向けての練習では、課題とされていたコミュニケーション不足をキャプテンの久保を中心にお互いが積極的に会話をするなどで補い、意識の向上が見られ、徐々に戦う姿勢へと変化していった。試合の結果は日本25（前半11・後半14）－韓国23（前半12・後半11）と2点差の勝利であった。簡単にゲームを振り返ってみると次のようなことが言えると思う。前半は、①ノーマークシュートを簡単に外し、なかなか点差が広がらなかった。②リバウンドボールが拾えずにそれが相手の点数につながった。③GKの好セーブ。後半に入ると①疲れの見えた選手が交代しても代わりの選手が同じような働きをしてくれた（選手層が厚い）。②積極的な攻撃が相手の退場プレーを誘い、数的優位の攻撃では、確実に加点した。③リバウンドボールをよく拾った。などが主に挙げられる。また、次の中国戦に関しては、この試合に勝てば4連覇が達成されるという中、それにともなう緊張もなく普段通りのプレーで終始圧倒して日本36（前半17・後半19）－中国18（前半10・後半8）のダブルスコアで勝利した。

選考会から本大会まで選手を派遣していただいたチーム関係者、事前合宿を含め多方面でご協力いただいた日本ハンドボール協会、高校生の練習相手を快く引き受けていただいた東海・日体・国士舘の3大学、そして4連覇という輝かしい成績を残してくれた選手に感謝申し上げたい。

最後になりますが、壮大な観があった開会式のアトラクションだけでなく、嵩山、少林寺、黄河などを見学し、高校生の彼らの心をひきつけ、感性を磨くに充分の教材を与えていただいたことにも深く感謝申し上げ結びとします。

久保 二千笑（山口県立岩国工業高等学校）

私は今回ハンドボールチームとして、第18回日韓中交流大会に参加しました。今回の大会に臨むにあたって、日本で合宿を行いました。大学生とのテストマッチを繰り返すうちに、どんどんチームが良くなっていきました。良い状態で大会をむかえられたと思います。今回は韓国、中国との2試合だけでした。韓国には接戦の末なんとか勝利し、中国には大差をつけ全員出場することができました。なによりも大会4連覇できたことが良かったと思います。私はキャプテンという立場で、チームをうまくまとめることはできなかったかもしれませんが、声を出しチームを引っ張りました。大会が終わった後はフレンドシップで各国の出し物を見たり、観光をしたりと充実した日々を過ごしました。中でも人間離れした技を繰り出す少林寺には驚かされました。今回の大会を通じて学んだことを、次のステップに行った時に生かしていきたいと思います。

鈴木 翔大（浦和学院高等学校）

私たち、高校ハンドボール選抜チームは、8月23日から29日に中国で行われた第18回日韓中交流大会に参加しました。ハンドボール競技は、25日から27日に日本、中国、韓国の3チームの総当たり戦で競技が行われました。男子チームは現在この大会3連覇中ということで、選手全員が気合いを入れて大会に臨みました。そして25日の韓国戦、この試合に勝てば、大会4連覇に大きく近づく一戦で日本は、苦しみながらなんとか競り勝ち25対23で韓国に勝ちました。続く27日の中国戦、この試合は終始日本ペースで試合が進み、36対18で中国に快勝しました。また、2勝したことで日本が大会4連覇を達成することができました。この勝利を選手や役員全員で喜び合いました。

そして、その後行われたフレンドシップ交流会では競技を終えた選手によるダンスや歌などの出し物や、各国対抗のミニゲームで盛り上がり、とても楽しい思い出を作ることができました。

今回の大会で私たちは、普段交流することのできない他国の選手との交流を深めることができ、さらにハンドボール技術の向上もすることができてとても満足しています。今後、私たちはこの大会で様々な経験をさせてもらったので、今後、その経験を生かして充実した高校生活を送りたいと思います。

女　子

女子監督　河先　修
（(財) 全国高体連専門部委員長・栃木県立栃木商業高校）

1993 年日本の福島県で第 1 回が開催され、今回で 18 回目となった「日・韓・中ジュニア交流競技会」。競技会の前身は 1968 年から開催された、「日・韓ジュニア交流競技会」そして 1982 年からの開催となる「日・中ジュニア交流競技会」と伺っています。このような歴史ある競技会に参加させていただき、参加者一同、関係各位に感謝申し上げます。

ハンドボール競技が高校選抜チームで参加するようになって 7 回目となる今回も、全国各ブロックからの推薦選手、全国選抜大会で活躍した選手、U-16 や U-18 で活動実績のある選手、NTS のセンタートレーニングにノミネートされた選手に参加を依頼、 4 月下旬選手選考会（ 1 泊 2 日）を大阪で実施、活動意欲も旺盛で競技に取り組む意識の高い選手での選考会は盛況でした。例年、事前練習会をインターハイ直後に開催地で、あるいは競技会への出発直前に実施しておりましたが、今年は経費の問題と国体ブロック大会との関係でこの時期での実施を断念、 8 月 11 日から 2 泊 3 日で東京・佼成学園女子高校で実施しました。諸般の事情（ユース世界選手権）で 9 名での合宿練習。少人数での練習でしたが、日本体育大学・東京女子体育大学・東海大学のご協力を得て選抜チームが一つのチームとして機能し戦える手応えを感じ取ることができるようになりました。

ジュニア交流競技会は開催地代表チームも参加し 4 チームでのリーグ戦となるのが慣例ですが、今回は開催地・中国河南省鄭州市代表チームの参加がなく中国・韓国・日本の代表 3 チームでの戦いになりました。国体のブロック大会直後に集合し、全員が揃っての練習は中国入りしてからの一日だけでしたので、中国・韓国との決戦の前に、比較的戦いやすい開催地代表とのゲームで最終確認をしたい思惑がありましたが、残念ながらそれは叶いませんでした。そんな厳しい状況のなかで、いきなりの韓国戦。この交流会での韓国代表チームは「比較的小柄だがスピードがあってフェイントの技術に優れている」イメージが強かったのですが、今回の韓国代表（井邑女子高校）は 170 ㎝台の選手が 7 名、これまでの韓国チームにはない大型選手が揃ったチームでした。試合の前半は日本・韓国互いに持ち味を発揮し拮抗した戦いが続いていました。しかし、中盤から韓国守備陣が日本の得点源であるバックプレーヤーを高い位置でアタック、日本は攻撃のリズムを失い単調なシュートやミスから失点し 5 点ビハインドで前半終了。後半 7 分まで日本は積極的な守備からの速攻や個人技などで 2 点差まで追い上げ勝機をつかみかけましたが、 1 点差に詰め寄る再三のチャンスをイージーなシュートミスで逃し、韓国をとらえることができませんでした。 1 日おいての中国戦。戦術を見直し徹底することでチームは落ち着きを取り戻すことができました。中国代表（国青女手）は例年同様 180 ㎝台が 5 名、170 ㎝台 9 名の大型選手をそろえるチーム。ここ数年、韓国のトレーニングを取り入れることにより確実にチーム力が向上してきています。日本は中国の大きな選手にロングシュートを打ち込まれる場面や大型選手に押し込まれる場面もありましたが、積極的に前に出て攻撃の芽を摘んでいく守備がうまく機能していました。中国の攻撃後の戻りがルーズなところをついて着々と加点し勝利をものにすることができました。日本は全選手が出場機会を得て、それぞれの良いプレーを随所に見せてくれました。

競技会後はいつものことですが反省ばかりが残ってしまいます。その中で毎回思うことですが、参加した選手達は大きな可能性を持っています。この選手達も含めた多くの若い将来性のある選手に、数多くの国際経験を積ませてあげることができれば、日本のハンドボールは世界に 1 歩近づくことができると改めて感じました。その日が必ずくることを信じ、参加した選手達の今後の活躍を応援したいと思います。

終わりに関係高校や保護者の皆様、ご協力ご指導いただいた大学・高校そして協会はじめ各方面の皆様に心中より感謝申し上げます。ありがとうございました。

佐藤 佳代子（岩手県立不来方高等学校）

私達は 8 月 23 日から 8 月 29 日まで中国の河南省鄭州市で行われた日韓中交流大会に出場してきました。この大会に出場するにあたって、東京都で 2 泊 3 日の事前合宿を行いました。短期間で選抜のチームから 1 つのチームにならなければいけなかったので、練習試合では、一人一人の得意なプレーを出すようにすることを意識し、また声かけをしてい



ます。

この大会に参加するにあたり、事前合宿に協力して下さった方々、塩谷部長を初めとする、女子監督の河先先生、繁田先生、短い期間でしたが本当にありがとうございました。

きながら、大学生に相手をしてもらいチームを作り上げていきました。22 日に前回の事前合宿にいなかった U-18 のメンバーも加わり全員が揃いこの大会への気持ちが高まり、さらにチームの勢いが増し、次の日、中国に向けて出発しました。中国に到着して、この空気に慣れることに少し時間がかかりました。食事も日本の味付けとまったく違っていたので、初めは食べられる物が少なく苦労しました。

25 日に韓国戦が行われました。初戦ということもあり、みんな緊張していました。また韓国のレベルの高い個人技に、圧倒されました。結果は 28 対 18 で負けてしまいました。リバウンドとシュート力の弱さが課題となりました。その結果を含めチームを盛り上げる声を意識して、27 日の中国戦に臨みました。中国戦では、1 点入るごとに盛り上げていくことができ、早々とペースを掴むことができ、前半からリードすることが出来ました。後半も点差を維持し、全員ハンドで勝つことが出来ました。チーム内には国際大会を経験している人もいれば、初めての人もいたので、とても良い経験となりました。結果は 1 勝 1 敗の 2 位となりました。今回の大会を経験して他国のハンドボールのレベルや、プレーを生で感じることができ、たくさんのことを学びました。これからハンドボールをしていく中で活かしていきたいと思います。

倉谷 星歌 (山口県立華陵高等学校)

日中韓交流大会は、試合だけでなく、3カ国の交流の場も設けてある、とても素晴らしい大会だと思いました。中国や韓国の文化を肌で感じる事ができ、そしてまた日本の良さに気付く事も出来ました。私はこのような大会に出場するのは初めてで、全ての事が新鮮で興味深かったです。

色々な事がありましたが、一番印象に残ったのはやはり中国、韓国との試合でした。私にとって初めての海外の相手となった韓国は、高さもあり、フェイントやスピードも兼ね備えているチームでした。私はあまり緊張せずに試合に臨む事が出来ましたが、試合は韓国のペースで進み、その焦りからテクニカルミスやシュートミスが増え、結局 10 点差で負けてしまいました。自分達の持っている力を全て出し切る事の難しさと、同時に大切さを感じました。中国の高さには正直圧倒されました。でも韓国に負けた分、中国には勝ちたい気持ちでいっぱいでした。その気持ちはみんなも同じで、明らかに韓国戦とは違う雰囲気で戦う事が出来たと思います。試合も自分達のペースで進んでいきました。韓国戦よりもみんなで声を掛け合いながら、得点が入った時はベンチも総立ちで喜んで、チームの一体感を感じました。中国に勝てた事はとても嬉しかったし、自信になりました。

今回この大会に出場して、たくさんの貴重な経験をさせていただきました。河先先生、繁田先生、そして 13 人の選手と共に戦えた事は、私にとって大きな意味を持ち、ハンドボールを更に好きになるきっかけとなりました。私達がこの大会に出場するにあたって、ご尽力くださった全ての方々への感謝の気持ちを決して忘れず、これからもハンドボールを頑張っていこうと思いました。本当にありがとうございました。

傷害保険　賠償責任保険　共済見舞金

スポーツ安全保険



対象となる事故 団体活動中の事故／往復中の事故

保険期間 平成22年4月1日午前0時より平成23年3月31日午後12時まで(申込受付は平成22年3月から)

5+ 5名以上の団体でご加入ください

加入区分・掛金・補償金額(団体活動を行う5名以上の方々で、加入区分をそれぞれお選び頂いてご加入ください。)

加入対象者		補償対象となる団体活動	加入区分	年間掛金(一人当たり)	傷害保険金額 死亡	傷害保険金額 後遺障害(最高)	傷害保険金額 入院(日額)	傷害保険金額 通院(日額)	賠償責任保険 支払限度額(免責金額なし)	共済見舞金
子ども(中学生以下(特別支援学校高等部の生徒を含む。))		スポーツ・文化・ボランティア・地域活動	A1	600円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円	身体・財物賠償 合算 1事故 5億円 ただし、身体賠償は 1人 1億円	突然死(急性心不全 脳内出血など) 180万円
		上記団体活動に加え、個人活動も対象 上段：団体活動中及びその往復中の補償額 下段：上記以外(個人活動など)の補償額	AW	1,150円	2,100万円	3,150万円	5,000円	2,000円	身体 財物賠償 合算 1事故 5億500万円 ただし、身体賠償は 1人 1億500万円	
					[illegible]1区分と同様					
					100万円	150万円	1,000円	500円	身体 財物賠償 合算 1事故 500万円	対象となりません
					日射・熱射病及び細菌性・ウイルス性食中毒は対象となりません。					
大人	高校生以上(65歳以上の方も加入できます。)	文化・ボランティア・地域活動 団体員の送迎、応援、準備、片付け	A2	600円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円	身体・財物賠償 合算 1事故 5億円 ただし、身体賠償は1人 1億円	突然死(急性心不全 脳内出血など) 180万円
		スポーツ活動 スポーツ活動の指導	C	1,600円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円		
		子どものスポーツ活動の指導 ※C区分でも加入可	AC	1,100円	1,000万円	1,500万円	2,500円	1,000円		
	65歳以上	スポーツ活動 ※C区分でも加入可 ※スポーツ活動を行わない方はA2区分	B	800円	600万円	900万円	1,800円	1,000円		
全年齢		危険度の高いスポーツ活動	D	9,000円	500万円	750万円	1,800円	1,000円		

※同一団体で1口しか加入できません。中途加入する場合、中途脱退する場合も年間掛金を適用します。加入後の加入者の入換え、加入区分の変更はできません。
※掛金には(財)スポーツ安全協会で運営する「共済見舞金制度」の掛金、1人20円が含まれています。
※危険度の高いスポーツ活動はD区分以外では補償されません。

インターネットからの加入受付を行っております。詳しくは、ホームページをご覧ください。 Web スポーツ安全協会 検索

財団法人 スポーツ安全協会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1丁目12番1号　**03-5510-0022**

保険の詳しい内容、資料の請求は、ホームページをご覧ください。

http://www.sportsanzen.org

●資料請求は、インターネットより受付けております。

〈引受幹事保険会社〉
東京海上日動火災保険株式会社 (担当課)公務第2部公務第1課
TEL 03-3515-4133 (平日9:00～17:00)
〈共同引受保険会社(平成22年4月予定)〉※予告なく変更となる場合があります。
あいおい損害　共栄火災　損保ジャパン　大同火災　東京海上日動
日新火災　ニッセイ同和損害　日本興亜損害　富士火災　三井住友海上

この広告はスポーツ安全保険(スポーツ安全協会傷害保険特約付帯普通傷害保険、スポーツ安全協会賠償責任保険特約付帯施設賠償責任保険等)の概要についてご紹介したものです。保険の内容は「スポーツ安全保険のあらまし」及び「重要事項説明書」をご確認ください。詳細は保険約款および特約書によりますが、ご不明の点がございましたら(財)スポーツ安全協会または東京海上日動火災保険㈱までお問い合わせください。

平成21年12月作成 1310-09-247

ロンドン オリンピック 出場祈念をこめて

……「政界産業界ハンドボール経験者の会」から



去る、10月25日に東京・銀座において、政界産業界ハンドボール経験者の会が、日本代表チームのオリンピック出場を祈念して開催されました。

本会は今回が三度目の開催で、最初は塩川元財務大臣、福井前日銀総裁を中心に極限られた政財界のハンドボール経験者6名で発足しました。昨年は40名余りの会員の参加、今年は総勢70名余りと盛大に開催されました。昨年度から塩川正十郎名誉会長、福井俊彦会長を筆頭に福地和彦氏（慶大ハンドOB会長)、藤森徹氏（京大ハンドOB会長）が事務局員として会が運営され、通称を界友会と定められました。



福井俊彦界友会長

福地氏の軽妙な司会で始まった宴は、福井界友会長より、会の発足のきっかけとなった平成15年8月の日本協会機関誌での塩川正十郎名誉会長（現東洋大学総長：今回は欠席）との対談話や、日本代表のオリンピック出場を祈念するご挨拶を頂き、乾杯発声の後、和やかな歓談へと移っていきました。歓談中は学生当時を懐かしむ話、夫々の自慢プレー、試合の話題で大いに盛り上がりました。ひとしきり歓談が終わった後、日本ハンドボール協会渡邊佳英会長より日本協会役員の紹介があり、選手一同はロンドンに向けて日々全力を挙げていることが報告されました。又、日本協会代表して川上専務理事より、協会役員、強化委員への激励の御礼と当面の目標としてアジアでの金メダルの決意が述べられました。更に、日本代表チームを預かる西窪強化本部長、酒巻男子監督、黄女子監督の紹介があり、夫々からアジア競技大会に臨む決意表明がありました。

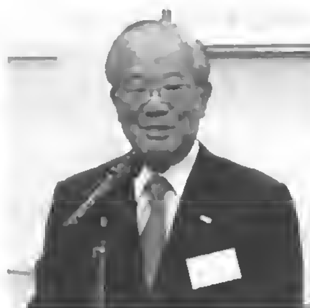
直近の大会である「アジア競技大会」に向け、アジア競技大会日本選手団団長の日本オリンピック委員会専務理事市原則之氏より、日本代表の誇りを持って正々堂々と闘って好成績を残して欲しいとの挨拶がありました。



協会役員一同



出席者を代表して、三井住友フィナンシャルグループ会長奥正之氏、フューチャーアーキテクト代表取締役会長金丸恭文氏（現東京都協会会長）より日本代表に対して激励と声援を頂きました。



奥正之氏



金丸恭文氏





[写真上]
(左より) 鶴保庸介議員、
浜田靖一議員、谷田川元議員

[写真左] 齋藤健議員

界友会は党派を超えた国会議員の方々がハンド経験者として会員で居られ、鶴保庸介議員（日本協会副会長）から議連事務局長として「ハンドボール振興議員連盟」の紹介があり、出席メンバーの浜田靖一議員（専修大学OB会役員）、齋藤健議員（日本リーグ副会長）、谷田川元議員（千葉県協会長）、夫々からも力強い声援を頂きました。

中締めとして、本懇親会の発足時からのメンバー（当時は三井物産副社長として参加）である、現協会副会長兼日本リーグ会長の多田博氏より、本会が皆様のお声がけにより、本会の賛同者が益々広がり、日本のハンドボールの発展への寄与を願う旨の挨拶があり会は終了しました。

以下、参加者からハンドボールとの出会い、魅力、日本代表への声援を頂きましたので、紹介いたします。

奈良 髙氏（元協和発酵工業（株））



高校・大学とハンドボールを続け、大学では福井界友会会長の４年先輩になります。当時、故高嶋日本協会理事長の元で日本協会の役員としてお手伝いもしました。オリンピックへの出場を心より祈念しており、是非とも頑張って欲しいと思っております。

目代晃一氏（エムジーリース（株））



高校時代は野球をしていましたが、大学でハンドボールを始めました。バスケットにないダイナミック性、７人のチームワークとフォーメイションが得点に繋がった時、体力が勝負など面白いところがハンドボールには多々あります。日本代表ですが、細かく拝見はしていませんが、練習を積み重ね、兎に角、オリンピック出場を果たして欲しいです。

野島康嗣氏（住友商事マシネックス（株））

中学校のハンドボール部は強かったのですが、プレーはしていませんでした。高校に入り、サッカーでもと考えていましたが、ハンドボール部に無理やり勧誘されました。ハンドボールは、自分自身がして面白いスポーツです。当面の目標とする韓国に勝つためには、大型プレイヤーの育成は重要な要素だと考えます。オリンピック出場に向け奮闘を期待しています。

三木 健氏（コベルコ建機（株））

中学３年生の時、サッカーからハンドボールに移りました。その後は大学まで続けましたが、ハンドボールの魅力は何と言ってもスピード、パワー、双方が噛み合うスポーツではないでしょうか。オリンピック出場に向け、選手を如何に育てるのかがポイントではないでしょうか。



左：野島康嗣氏、右：三木健氏

鈴木陽一氏（三友サービス（株））



高校からハンドボールを始めましたが、学校で最も強い部活でした。ハンドボールは、ぶつかり合いや、フェアな当たりなどに面白さを感じています。オリンピック出場には、やはり監督の指導力は大きなものがあると考えます。頑張って勝ち抜き出場を果たして欲しいと願っています。

迫本淳一氏（松竹（株））



ハンドボールは高校時代だけですが、２年生の時には公式戦全敗、しかし、３年生の時には県で優勝し創部以来初のインターハイ出場を果たしました。現在は全日本学生ハンドボール連盟会長を仰せつかっております。ハンドボールは実に戦略的な競技であり、欧州でも人気があるスポーツの一つです。ハンドボールの面白さを広く伝えるとともに、早い時代から、選手の育成と強化をする必要があると考えます。アジア大会で好成績を挙げ、その勢いでロンドンオリンピック出場を祈念しています。

寄稿

ハンドボールとのかかわりとミュンヘンオリンピック回顧

北信越学生ハンドボール連盟会長
若山　博



ハンドボールのボールにふれて63年となる（11人制）。昭和22年終戦後の混乱の時期である。

パイロットを夢見て旧制中等学校の航空機科に進んだものの終戦であえなく廃止となり、六・三・三・四への学制の改革など、教育、スポーツの変革の時代でもあった、この時に第二回石川国体が開催され、ハンドボール選手も食糧を持参しての参加であった。

国体を機にハンドボールの道に入った私は、高校、大学でプレーをし、昭和30年卒業と同時に郷里にもどり、県協会の一員として、普及・強化につとめた。日本協会が主催する大会(中学,高校,高専,大学、日本リーグ、国体、全日本総合など）を主管し、これに伴い協会の組織の確立、審判員、コーチの養成資質の向上、選手強化に成果があがった。その実、全国制覇をなすチーム、ナショナルチーム入りする選手を輩出することが出来た。

県協会理事長（25年間）務めた間に、日本体育協会理事（一期）、日本ハンドボール協会理事を5年間させていただき、特筆すべきは、斉藤英四郎会長のもと日本協会は社会的人格をもつものとの考えから基金をつのり、財団法人格を取得し今日の日本協会発展の基礎となったことに参画出来たことである。

さて当時を偲び語り伝えるために、日本が初めてハンドボールが参加したオリンピックについての観戦メモをもとに述べることとする。

過去にオリンピックでハンドボール競技をモスクワ、アトランタで決勝を観戦したが、やはり私にはミュンヘンオリンピックである。

バイエルンのさわやかな大自然にすっぽりと包まれたミュンヘンの街で第20回オリンピック大会が行なわれ、ローデシア問題、ゲリラ事件、ブランデージＩＯＣ会長の引退と波乱続きの大会であったが、会期を一日延長してその幕を閉じた大会であった。

オリンピック日本初参加となった、ハンドボール競技は昭和47年8月30日から始まり、昭和11年のベルリン大会以来実に36年ぶりに実施され、その第一戦を観戦する機会を得た。地図を片手にギョッピンゲンへ汽車で出かけた（予選リーグは地方4会場で行なわれ、この内の一つギョッピンゲンは私の起点ミュンヘンより170キロ離れた古い田舎町であった）。

ハンドボール発祥の地ともいわれる西ドイツでの開催であり、会場に着いたとき永年の願望であった本場のハンドボールにふれられる喜びからか、現役時代におぼえた胸の高鳴りを感じた。

ギョッピンゲン・スポーツホールは約4千人収容の清らかで美しい外観をした体育館であり、内部はむだを省いた堅固な作りで床材は合板が張っており、われわれには珍しい白色で、汗が床におちても滑らないものであった。

定刻午後7時、第一戦の日本対ユーゴスラビア（世界選手権第3位）戦が始まった。

日本選手はもてる力をいかんなく発揮、7メートルスローで先行、3対3まで互角の戦いであったが、その後体格にまさる、長身ぞろいのユーゴはジャンプシュートで加点して差を開き、後半に入っては多彩な攻撃で追いすがる日本を振り切った。ユーゴ20（11・7、9・7）14日本のスコアで、日本は悲願の8強入りを目指しての一戦であったが、ヨーロッパの壁の厚さに閉ざされた。ハンドボール競技の適性に見る、体格、敏捷性、瞬発力、弾力に富んだ柔軟性、ともにユーゴが優位であると見た。

技術的には基本である、パス・キャッチの正確さ、最後の一瞬まで放さぬキープ力、ボールスピードの速さが目立った、好守をほこるキーパー本田も日頃のスピード感覚と異なり、大きな狂いを生じていたようである。終始日本チームは緊張の連続であり、ユーゴは余裕をもって戦っていた。

この一戦を熱中して観戦応援したため、ゲーム時間、1時間10分の短さに驚き、永年の関係者の労苦を思い、悪夢を見たような気持ちであった（ユーゴは以後、一戦一戦を確実に戦い、今大会の優勝を飾った）。これは38年前の私の観戦記である。

現在、私は昭和39年11月に創設した、北信越学生ハンドボール連盟の理事を経て会長として若い選手達と共にハンドボール競技の底辺の一角を担い、昨年はインカレ（於金沢）、今年は東日本インカレ（於長野）を主管し、若者を育て、競技を楽しみ乍らの日々である。

～育成の起爆剤に期待～

企画・広報委員
早川　文司

Free Throw（フリースロー）

ジャパンが飛躍するために欠かせない課題のひとつに、ジュニア、ユース層の強化がある。ハンドボール界に限らず、各競技団体とも力を注いでいる。

特に最近目を引くのがクラブチームでの育成。元来、日本のスポーツは学校体育主流で成長を遂げてきた経緯がある。しかし、現在では全国各地にクラブが誕生し、そこで基本を学ぶ姿が目につく。

中でもサッカーはクラブ出身の選手を多く排出していると言っていいだろう。インターハイや全国高校選手権など全国大会出場校のメンバーを眺めてみると、各校にクラブ出身者の割合が多いし、年ごとにその傾向は増している。

このように日本の育成年代の現状は、クラブが背負っている部分が多いし、社会人層を眺めてもかつての実業団からクラブ制に移行している流れがある。

こうした現状に呼応するように、11月に大阪でクラブチームによる中学生の大会が開かれた。銘打って「第１回中学生クラブチームカップ」。男子がトーナメント方式、女子がリーグ戦だった。

要綱によると、大会の目的には「全国のクラブチームで活動する中学生に、ハンドボールを通じて仲間との交流、ハンドボールの技術向上・心の育成の場を与える」と記されている。

残念ながら今回は男子が静岡から福岡までの８クラブ、女子は４クラブの出場だった。

今回は準備の都合などがあったのだろう。登録準備中や小学６年生などを加えてもＯＫなど参加資格は緩やかだったが、次回からは小学生などは認めないという。

このような新たな大会をスタートさせるための準備は大変に違いない。でも、ハンドボールの発展、振興、さらに育成に情熱を注いでいるからこそ出来ることではないかと思う。

正直、この世代は技術の向上だけでなく、人間的にも“育成”に大切な時期である。指導者にとっては気遣いも相当だろう。とはいえ、以前からよく言われるように「優れたプレーヤーである前に、まずは立派な社会人であれ」へつなぐ年代だ。

この大会が今回を手始めに多くの優秀な「人間」発掘につながり、将来のわが国ハンドボール界を背負って立つ人材を育てる場になっていくことを願わずにはいられない。運営が軌道に乗ってくれれば、もっと範囲が広がり、小学生年代にも門戸が開ければ、これほどうれしいことはない。

さらに全国クラブ大会など大きなウエーブが沸き起これば、なおさら万々歳である。

ヨーロッパのハンドボールLIFE 2

ドイツのハンドボールLIFEと、若い選手へ送るメッセージ

BSV ツヴィッカウ
内林絵美

1．所属チーム

2008／09シーズンから、BSVツヴィッカウというブンデスリーガ2部南地区のチームに所属しています。ザクセン州の南に位置し、前号掲載の植松伸之介さんのプレーするEHV Aueからは、車で30分ほどの距離です。

東西ドイツが統合されてから、ハンドボールの「壁」も崩れ、新しいブンデスリーガが発足されたのですが、旧東ドイツ時代からハンドボールが盛んで、子供の育成に力を入れてきたツヴィッカウは、1990年にブンデスリーガ2部に位置づけされ、それ以来20年間、ずっとブンデスリーガでプレーし続けている伝統のあるチームです。

2008／09年シーズンは最後の最後までプレーオフ進出をかけて戦いましたが、一歩及ばず5位（12チーム中）、昨シーズンは打って変わって降格争いを最後までする羽目になり、最終的には8位でシーズンを終えました。

2008年の移籍は、私が2004年に初めてドイツに来た時の所属チーム、SCリーザの監督がツヴィッカウの監督になり、直接誘いを受けた事がきっかけでした。



練習場所は試合をいつも行っている700人収容の体育館で、試合になると立ち見の観客も出るほど満員になります。

練習はシーズン前の準備期間（7月～8月）は月～金まで毎日、さらに午前練習、週末は練習や、練習試合、トーナメントなどに参加していたので、週に8～10回練習していました。

9月以降シーズンが始まってからは、水曜日以外の毎日、19時頃から毎日1時間半～2時間、練習しています。

練習の特徴は、時間が短い分、内容が濃く、高い集中力を継続してトレーニングできるという点だと思います。さらに監督がザクセン州のプロの監督をしていたので、テクニック、コーディネーション、1対1での身体接触という個々の能力を伸ばすようなトレーニングが多いのも特徴です。

ブンデスリーガ2部は、基本的にプロ契約はできないので、選手全員が書類上はアマチュアという事になっていますが、もちろん金銭面などの条件的にはプロとして契約している選手もいます。給料などの契約内容は、同じチーム内でも選手によって大きな差があります。ツヴィッカウには私を含め外国人選手が5人いるのですが、外国人選手は比較的、好待遇の契約をチームと結んでいます。

2．生活環境

チーム練習は現在夕方の4回だけなので、私は個人的に週に2度ほど、スポンサーのフィットネスクラブやスタジアムで自主練習をしています。

それ以外の時間は、大学の勉強や、卒論にあてています。

試合はホームでは17時からなので、いつも同じリズムで試合に向けて準備しています。

アウェーでは、19時くらいから試合開始になる事が多いので、午前中に大型バスで出発し、試合をして、夜中の2時～5時に帰宅というのが、いつものパターンです。

片道4～8時間が移動でかかりますが、基本的にはいつも日帰りバス移動です。

3．今後の予定

ハンドボールは、選手としては今シーズンで引退する覚悟でプレーしています。

今シーズンで引退したいというわけではなくて、新しい挑戦ができないなら現役引退を考えているという事です。

ブンデスリーガ2部でプレーするという事は、私の夢でしたが、今の状況をキープする為に、同じ場所に居続ける事はしないと思います。

現在は、ツヴィッカウのBユーゲント（14才から16才。ドイツでは、AからEまで年齢ごとに分けられ、子供達もホーム＆アウェーでシーズンを行います）のコーチ／監督もしていますが、現役を引退した後は、監督になりたいと思っています。

なので、日本に帰ってプレーを続ける予定はありません。大学卒業後にお世話になっていたSCかながわに戻ってプレーする事も考えていますが、自分のハンドボールが生活の中心に来るような毎日は、日本では送らないと思います。

＊

ドイツは、ブンデスリーガ1部、ブンデスリーガ2部（北地区、南地区）を頂上として、ピラミッド型に、3部、4部と続き、下は10部近くまで組織化されています。

その仕組みを来シーズンから大幅に変更し、ブンデスリーガ2部は南北が統合されます。

いまだに反論も強く唱えられている大幅改正ですが、ブンデスリーガのプロフェッショナル化、メディアへのさらなる進出を図る、ドイツハンドボール協会の改革案です。

不況も重なり、ライセンスを剥奪されるチームも後を絶ちませんが、ドイツにおけるハンドボールの人気スポーツとしての位置づけは、しばらくは不動のままだと思います。

4．日本への提言

私の事を知っている人のほとんどは、私がブンデスリーガ2部で契約できた事に対して驚いたと思います。私は、中、高、大学と全国で名前を知られるような選手ではありませんでしたし、自分でも大学以降は現役を引退しようと思っていました。

でも、ハンドボールに対してはいつも真剣でしたし、夢に向かってずっと走り続けてきました。

もし、日本の若い選手がこの機関誌を目にする機会があるのならば、ハンドボールに真剣に向かい合って、夢に向かって邁進してもらいたいです。

その上で、周りの人を思いやる心や、勉強に取り組む姿勢も忘れずに、長くハンドボールを続けてもらいたいと思います。

ドイツでは、ハンドボールと同じだけ、人とのつながりが、語学への取り組みが、私を助けてくれました。感謝の気持ちを持ち続けて、いつもプレーするように心掛けています。

＊

日本が世界と互角に戦うように、そしてオリンピックに出場できるようになるために、という質問に、私が答えるのは適当ではないと思います。

日本を離れてから6年が経ち、その間、日本のハンドボールを目にする機会がほとんどありませんでした。

ただ、私の考えを書くのであれば、日本は独自のカラーで、スピードや確かな技術を持って、世界と戦うべきだと思っています。

大型選手を起用したり、フィジカルを強化する事も大切だと思います。でも、それは恵まれた体格のヨーロッパの選手と戦う上でのスタートラインに立つ事であって、最終的には、日本の脅威であるはずのスピードハンドを、確実なテクニックを、それに合った戦術を持って戦うべきだと思います。

そして、どんなハンドボールを目指すにしても、広い視野で、長い計画を持って、全てを進めるべきだと思います。



ドイツでは、ミニハンドのカテゴリーの試合では、マンツーマンDFをするように取り決められています。子供達が1対1を、そして、空いたスペースに走り込む事を学ぶ為です。

私が教えるBユーゲントでさえ、下のリーグでは（年代ごとにも1部リーグ、2部リーグというように、レベルが分かれています）選手交代はOF時のみ許されています。OF専門、DF専門の選手を作らないためです。

そして州ごとに、選抜を教える監督（Aライセンス）、週一回の強化トレーニングを各地で行うための地域の監督数名（Bライセンス）が選ばれて、小さな街の選手でも、才能があれば、強化トレーニングに参加し、州選抜でプレーするチャンスが与えられ、ザクセン州ならば、中学生くらいの年齢から、ライプツィヒ、ツヴィッカウといったハンドボールが盛んな街に移籍していくという構造ができあがっています。

日本の良さが最大限に発揮できるハンドボールを目指していくと共に、将来の日本を背負って立つ子供達の育成にも、さらに力を入れて、是非オリンピック出場を果たしてもらいたいです。

＊

遠く日本から応援してくれる人達の支えがあって、今の私がいます。

日々感謝の心を持って、これからも頑張っていきたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。



いよいよ地球
間寛平アースマラソン、

地球一周
目指して
がんばれ！
間寛平！！

Ⓒ間寛平アースマラソン製作委員会

私たち伊藤超短波はコンディショニングサポー
通じて間寛平アースマラソンを支えています。



2009.3.12
アメリカ

サポートチームはロサンゼルスに上陸した寛平さんを出迎え、太平洋のヨット生活で衰えた筋肉を戻すために電気刺激装置でEMSトレーニングなどを行い、アメリカ大陸横断をサポートしました。

Day 86



2009.9.1
フランス

欧州入り直後の右足ふとももの故障。歩くのも困難な状況でも決して諦めない寛平さんのためにサポートチームも現地入りして超音波療法、電気刺激などで入念なケアを行いました。

Day 259



Day 677

ー周！！
ゴール間近！！



2010.1.?? to OSAKA !
GOAL!!

もう少しやで～！
待っててや！

ートを

2010.10.24
中国

長い長いユーラシア大陸のラン。休養日には低周波治療器でコンディションケア。疲れを残さず、怪我の予防を日々行うことが、明日のゴールにつながる"1歩60cm"になります。

いつでもどこでも自分の体を自分でケアする「フルタイム・セルフケア」という発想から生まれた、ITOのポータブル低周波治療器「AT-mini」。トレーニングで損傷した筋肉に、3つの電気刺激モードが効果的に働きます。ライバルを、そして自分をもっと超えていくために。この小さなボディに盛り込まれた先進のテクノロジーが、戦うあなたを力強くサポートする。

AT-mini
AT ミニ

管理医療機器(特定保守管理医療機器)〈クラスII〉
低周波治療器　医療機器認証番号 220AABZX00344A01



50g 超軽量
本体重量わずか50g(充電池含む)、サイズも極小。ITOの技術が、今までになかった超軽量・コンパクトな低周波治療器を実現しました。

12時間 連続使用
リチウムイオンバッテリーにより、最大12時間の連続使用が可能。この小ささで、スタミナも一流です。

3つの治療モード COMB / PAIN / CARE **鎮痛・治癒**

● **COMB〈鎮痛＋治癒〉Allタイムケア**
トレーニングを終えた全てのアスリートに効果的な、鎮痛と治癒を組み合わせたケアモードです。

● **PAIN〈鎮痛〉ONタイムケア**
トレーニング中など、現場で起こった捻挫や筋肉・関節の痛みといった急なアクシデントに有効です。

● **CARE〈治癒〉OFFタイムケア**
移動中や休憩中などの体を休めている時にも、トレーニングで損傷した筋組織の治癒を促進します。

―― ハンドボール日本代表をサポートしています！ ――

製造販売元 **伊藤超短波株式会社**
東京都練馬区豊玉南3-3-3　http://www.itolator.co.jp/

メディカル事業部
本　社：〒113-0001 東京都文京区白山1-23-15
TEL. 03(3812)1216(代)・FAX. 03(3814)4587

営業所:

仙台	TEL. 022(306)7667	FAX. 022(306)7688
関東甲信越第1	TEL. 03(3812)1217	FAX. 03(3814)4587
関東甲信越第2	TEL. 03(3812)1218	FAX. 03(3814)4587
関東甲信越第3	TEL. 03(3812)1219	FAX. 03(3814)4587
名古屋	TEL. 052(701)4515	FAX. 052(701)6905
東大阪	TEL. 072(242)1041	FAX. 072(242)1040
西大阪	TEL. 072(242)1043	FAX. 072(242)1040
広島	TEL. 082(506)1421	FAX. 082(263)9070
福岡	TEL. 092(573)6053	FAX. 092(573)0218
デンタル部門	TEL. 03(3812)4151	FAX. 03(3814)4587
臨床治験部	TEL. 03(3812)4152	FAX. 03(3814)4587

イトー スポーツプロジェクト
ITO Sports Project
www.sports.itolator.co.jp

イトースポーツプロジェクト　検索



第8回ハンドボールコーチング研究会

平成22年3月19日、駒澤大学において、第8回ハンドボールコーチング研究会が開催されました。本研究会は、全国指導者が自身の経験や・知見を持ち寄り、実際の現場で有用な情報を共有する機会として位置付けられています。

研究会の発表内容については、本誌で連載報告していただく運びとなりました。

今月は清水宣雄先生（国際武道大学）の発表内容「ハンドボールにおける基本プレイ・アルゴリズム構築に関する研究」を報告させていただきます。なお、他の発表については次号以降で報告を連載いたします。

（財）日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人松韻学園福島高等学校）

ハンドボールにおける基本プレイ・アルゴリズム構築に関する研究

清水 宣雄（国際武道大学体育学部国際スポーツ文化学科）

キーワード：ハンドボール、レフェリー、スキルアップ、アルゴリズム

1. はじめに

ハンドボールの発展のためには、競技のレベルアップが不可欠であり、そのために車の両輪となるのが、指導と審判である。指導によって、プレイヤーがスキルアップをしても、試合において、レフェリーが正しい判定をしなければ、指導者の努力は報われず、プレイヤーの進歩が阻害されることさえある。

したがって、レフェリーのレベルアップは審判だけの問題ではない。指導上も大きな問題となり得る。昨今の我が国の現状を振り返ると、レフェリーの全体的なレベルアップが必要であるとの意見が多く、レフェリーの育成が急務であると言える。

筆者は、ハンドボールにおける「かた」の創設を目指し、基本プレイ・アルゴリズムの構築を試みてきた。[3)6)7)] 本研究においては、審判技術の向上に寄与することを目標として、レフェリングのコンセプトを構築した。

本研究の内容は、バングラデシュ・ハンドボール協会の要請により、国際協力機構（JICA）シニア短期ボランティアとして、筆者が同国において行った、2006年・2009年の審判講習会の内容を基に、筆者が国際審判員として活動した際に受けた指導内容を加味し、発展させたものである。したがって、財団法人日本ハンドボール協会審判委員会の公式見解となるものではない。

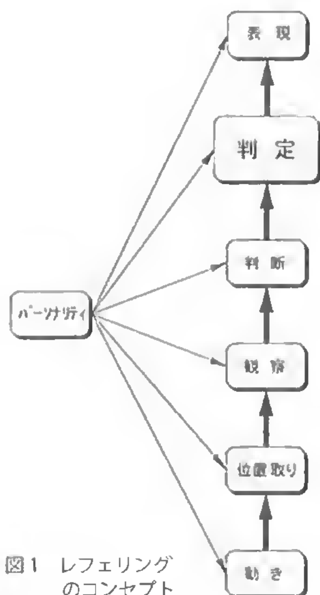


図1 レフェリングのコンセプト

2. レフェリングのコンセプト

筆者の考えるレフェリングのコンセプトを図1に示した。レフェリーの任務は、「判定」を下すことであり、より正しく伝達するためには、「表現」が重要である。より良い「判定」を下すためには、「判断」が重要である。より良い「判断」をするためには、「観察」が重要である。より良い「観察」のためには、「位置取り」が重要である。より良い「位置取り」のためには、「動き」が重要である。

全ての段階において、レフェリーは各自の体力や経験・知識をもとに行動するので、より良い働きをするためには、「パーソナリティ」が重要である。

（1）判　定

●一貫性

・基　準

共　有

●目　標

・安　全

・公　正

スポーツマンシップ

試合におけるレフェリーの第一の任務は、判定を下すことである。レフェリーは各自の判断をもとに、判定を決定し、それを表現することによって対戦しているチームに伝え、試合をコントロールしなければならない。判定の良し悪しによって、その試合におけるレフェリーの評価が下され、優劣が付けられると言える。

判定を下すのが難しい、微妙な事象が発生することが多々あるが、判定の正確さよりも、判定を下すこと自体が重要である。事後に熟慮し、遅れて完璧な判定を下すよりも、正解に限りなく近い判定を、瞬時に下すことが求められる。もちろん、アドバンテージルールを採用し、プレイを続行させることも、判定の一つである。

1）一貫性

試合中に、対戦しているチームがレフェリーの判定に対して不満を持つのは、判定に一貫性が無い場合が最も多い。同じようなステップが、ある場面ではオーバーステップと判定され、他の場面では流されることがある。同様に、同じような接触プレイが、ある場面では防御側に罰則が与えられ、他の場面では、反則ではないとして流される。極端な場合には、攻撃側のファ

ールとされることさえある。もちろん、一方のチームに、不利な判定が偏ることは最悪である。

対戦しているチームにしてみれば、個々の判定が本当に正しいかどうかよりも、一貫性が保たれる方が重要である。レフェリーの判定に一貫性があれば、その判定基準に合わせてプレイすることが可能であり、その可否によって勝敗が左右されるからである。

レフェリーが、ゲームにおける判定の一貫性を保つためには、先ず判定基準を設定することが必要である。判定を下さなければならない事象が発生する度に、どう判定を下すべきか、判断をしていては、一貫性を保つことは困難である。先に設定した基準に照らし合わせて、判断をするべきである。

さらに、一貫性を保つためには、設定する基準のレベルが重要である。基準を一定に保つためには、自分の判定能力以上のレベルを設定することはできない。

実際に対戦しているチームにしてみれば、微妙なステップの正誤に拘り、判定が振れるよりも、誰の目から見ても、明らかなオーバーステップさえ判定されれば、問題はない。

また、身体接触に関しても、許容範囲を明確に示すことが重要である。その試合において、行っても許される行為と許されない行為が理解できれば、対戦しているチームは正しい防御活動を目指すことができるからである。未熟なレフェリーが無理に一発退場を判定しても、その後、その基準を保つことができず、警告さえ判定できないようなことは、避けなければならない。

筆者は国際大会において、些細な反則には拘らず、重大な反則を見落とすな、という指導を受けた。それは、「Small potatoes are no problem. Big potatoes are important.」と表現された。

判定基準は、ステップ、身体接触、ボールの扱いなど、判定項目毎に単独で存在するものではない。例えば、身体接触に関して、非常に厳しい基準が設定されながら、ステップに関して、甘い基準で判定された場合、防御することが非常に困難となる。それぞれの試合における判定基準は、バランスに配慮しながら、均一に設定されるべきものである。

もし、二人のレフェリーの技量に差がある場合には、判定基準のレベルを、低い方のレフェリーの判定能力に合わせるべきである。

一貫性を保つためには、二人のレフェリーは判定基準を共有しなければならない。試合中に二人の判定基準が異なると、対戦しているチームの混乱を招き、最悪の場合には、判定の食い違いを発生させる恐れがある。

したがって、試合中に一方のレフェリーが判定を下した際には、もう一方のレフェリーは、その判定基準を理解・共有しなければならない。それ以降、同様の状況が発生した場合には、どちらのレフェリーであっても、同一試合内においては、同じ判定が下されなければならない。

判定基準を共有するために、二人のレフェリーは、頻繁にコンタクトを取り、意志の疎通を図らなければならない。そのために、フリースローや 7m スローの際や、位置を入れ替わる際に、お互い近寄り、言葉を交すことも必要である。

2）目　標

レフェリーは判定の一貫性を保つためにも、目標を持って試合に臨まなければならない。対戦しているチームと異なり、その目標が勝利である筈はなく、レフェリーは、目指す目標に向かって、試合の展開に責任を持つことになる。

すなわち、対戦しているチームにどの様なプレイをさせるのか、明確なビジョン、ハンドボール観を持ち、その様に試合をコントロールする、ということである。もちろん、試合の流れ・勝敗をコントロールするという意味ではなく、その様なことが許されないことは言うまでもない。

試合における、レフェリーの目標の一つは、安全であると考える。攻防のチームが混在するゴール型球技であるハンドボールにおいては、身体接触が頻繁に発生する。その際、外傷の発生を防止することは、レフェリーの責務の一つである。

ルールにおいても、相手に危険を及ぼす行為は認められてはいない。しかし、身体接触の許容範囲について、レフェリーが適切な判定を下さないと、試合の様相が荒れたものとなり、外傷を誘発するような事象が、頻発する恐れがある。

身体接触の許容範囲は、その試合に適切なレベルに、設定されなければならない。身体接触が認められていないバスケットボールとは異なって、ハンドボールでは正当な身体接触は認められており、アドバンテージルールの活用による、接触しながらのプレイが、醍醐味の一つとなっている。

したがって、初心者レベルの試合と、トップレベルの試合における、身体接触の許容範囲は同一ではない。初心者は軽い接触でもバランスを失い、プレイを続けることが困難であるのに対し、トップレベルのプレイヤーは、ハードな接触でもバランスを保ち、プレイを続行することができるからである。トップレベルの試合において、身体接触の度にレフェリーが笛を吹いて試合を中断していては、ハンドボールの醍醐味が失われ、試合の興味が半減してしまうことになり兼ねない。

この件に関して、「試合のレベルによって、ルールが異なるのか」という批判を受けるかもしれないが、判定の基準が異なる訳ではない。反則を犯した側に注目すれば、反則の程度は異なるかもしれない。しかし、反則を受けた側に注目すれば、バランスを失ったかどうか、プレイが続行可能かどうかということになる。この観点からすれば、判定の基準が異なることはない。

試合における、レフェリーの目標のもう一つは、公正であると考える。ハンドボールに限らず、スポーツは公正なものでなければならない。試合において、不正を働く者の方が有利になることがあってはならないのである。不正を見逃さず、適切な処置をすることは、レフェリーの責務の一つである。

公正の目安となるのが、スポーツマンシップであると考える。ルールにおいても、スポーツマンシップに反する行為が禁止されており、反すれば厳格に処罰される。

選手宣誓によく用いられるフレーズでもあるが、プレイヤーは「スポーツマンシップに則ってプレイ」しなければならないのであり、そうなるように、レフェリーは導かなければならない。

それでは、「スポーツマンシップ」とは、何なのか。「スポーツマンシップに則ってプレイする」とは、どの様にプレイすることなのであろうか。「スポーツマンシップ」が何であるかを知らずに、「スポーツマンシップに則ってプレイする」ことは

可能なのであろうか。

広瀬一郎は以下の三つを尊重することであると述べている。[1)]

①相手　②レフェリー　③ルール

レフェリーは「スポーツマンシップ」を十分に理解した上で、判定を下さなければならない。ルールを無視するような反則や、レフェリーを騙そうとするシミュレーションプレイを放置してはならない。

（2）
表　現
- ●笛　・タイミング
  - ・音の大きさ
  - ・音の長さ
  - ・音　色
- ●方向指示
- ●ジェスチャー
- ●協　力
- ●自　信
- ●コミュニケーション

試合におけるレフェリーの第一の任務は、判定を下すことであるが、判定は表現されることによって、初めて明らかになる。例え、正しい判定であっても、表現が不適切な場合には、誤りと見なされることもある。したがって、レフェリーは、正しい判定を下すことは当然であるが、適切な表現をすることに拘らなければならない。

1）笛

笛を吹くことによって、判定の大部分は表現される。適切な笛が吹かれた場合、観客を含む全員が、瞬時に状況を把握し、行動を起こすことができる。しかし、不適切な場合には、理解できず、反応が遅れることもある。

スローオフや7mスローなど、プレイを再開させる笛を吹く際には、同時にスローの方向を示す等の動きを入れると、より分かり易い笛となる。

笛を吹く場合、最も重要なのが、吹くタイミングである。基本的には、事象が起こった瞬間に吹くべきである。笛が遅れると、判定を下した事象が、不明となる場合が多く、不信を招く要因となり兼ねない。反則の判定が遅れ、次のプレイが展開した後に笛を吹くと、一方のチームに有利な判定をしたのではないかと疑われることさえある。

もちろん、アドバンテージ・ルールは意識しなければならない。反則をされたプレイヤーが、ボールを保持していれば、少なくとも3歩3秒のプレイを保証するべきである。しかし、その後の展開に発展性がない場合や、ラフプレイを誘発しそうな場合には、速やかに笛を吹き、プレイを中断させるべきである。

基本的に笛の音は、大きく良く聞こえるものでなければならない。小さな音では、プレイを止めることができないばかりでなく。判定に自信がない印象を与えることがある。

しかし、常時、必要以上に大きな音を出すことは、対戦しているチームの反感を招くこともある。重要なのは強弱を付けることである。罰則や7mスロー、ターンオーバーの時には大きな音を出し、それ以外の場合には、必要以上に大きな音を出さないようにする。明確なゴールキーパースローやスローインの時に、不用意に笛を吹くと、他の判定を下したのかと、プレイヤーに誤解されることさえある。

原則として、音が大きいときには長く、小さいときには短くする。音の最後はフェイドアウトではなく、明確に切った方が良い。特に、得点の際に2回、タイムアウトの際に3回吹く場合、明確に音を切らないと、オフィシャルの対応が遅れる危険性がある。

笛の音色を変えることによって、様々な表現をすることができるので、レフェリーは多彩な音色を出せるようにしておくべきである。しかし、過度の演出は、避けなければならない。

レフェリーが、適切な笛を吹いた場合には、全てのプレイヤーが、音を聞いただけで、瞬時に状況を理解し、素早く反応するので、試合がテンポ良く進行される。

2）方向指示

原則としてレフェリーは、笛によってプレイを止めると同時に、どちらのボールで再開されるのかを示すために、方向指示をしなければならない。方向指示が遅れると、どちらのチームも、次のプレイの準備ができないので、先に気付いたチームが、一方的に有利になる展開が、生じる可能性がある。これでは、レフェリーの笛によって、展開が左右されており、決して望ましい姿ではない。

3）ジェスチャー

方向指示の後に、必要があれば、ジェスチャーを入れる。基本的には笛と方向指示で十分であるが、オーバーステップやパ

ッシブプレイなど、攻撃側にしかあり得ない反則の場合には、方向指示を省略することも可能である。

特に、相手に対する動作におけるファールに対しては、安易にジェスチャーを入れるべきではない。段階的に罰則を適用するファールに対してのみ、入れるべきである。イエローカードを出さなくとも、ジェスチャーを入れるということは、そのファールを繰り返せば、次は警告であるという、レフェリーの意図を示すことであり、プレイヤーをコントロールするための一つの方法である。もちろん、警告や退場の場合には、基準を示すためにも、ジェスチャーは必要である。

基本的には、ルールブックに記載されたものだけが、ジェスチャーであり、その他の表現を多用するべきではない。時折、個性的な表現をするレフェリーが見られるが、自分勝手な表現は伝わり難くいこともあるので、注意が必要である。

また、反則ではないという表現を不用意にした際に、ペアレフェリーが反則の判定をしてしまうと、両レフェリーの判定基準が異なることを、露呈してしまうので、注意が必要である。

4）協力

レフェリーが協力しあうことで、判定はより分かりやすくなる。例えば、7m スローに罰則が付加される場合など、片方のレフェリーが 7m スローのジェスチャーをし、もう片方のレフェリーが罰則のジェスチャーをすれば、一度で判定を表現することができる。

5）自信

判定は自信を持って表現されなければならない。自信がないように見える表現では、不信感を招く恐れがあり、レフェリーが試合のコントロールを失う原因となり兼ねない。レフェリーの自信は、笛の音や立ち振舞いなど、全体的な印象から滲み出るものであり、心の動揺が現れないように注意しなければならない。

しかし、自信過剰の表現は、反発を招く恐れがあり、これもまた、試合のコントロールを失う原因となり兼ねないので、注意が必要である。

6）コミュニケーション

試合をコントロールするためには、対戦しているチームの協力が必要であり、そのためには、コミュニケーションが不可欠である。レフェリーの意志を、より正確に伝える為には、必要に応じて対戦しているチームと言葉を交わしたり、身振り動作によって、コミュニケーションを図ることも重要である。もちろん、過度の接触は、相手チームの不信感を招く恐れがあるので、注意が必要である。

（3）判　断
- ●洞察力
- ●勇　気
- ●正当性
- ●冷静さ

レフェリーは、観察によって得られた情報をもとに、判断をして、判定を下している。判断は内なるものであり、外部から目に見えるものではない。それに対し、判定は外なるものであり、外部から目に見えるものである。レフェリーの判断を、表現によって、見える形にしたものが判定であり、判断と判定は、表裏一体であると考える。

正しい判断なしに、正しい判定をすることはできない。レフェリーは正しい判断をするための努力を、惜しんではならない。

1）洞察力

レフェリーが、より正しい判断をするためには、洞察力が重要である。事象を観察することによって、確認できる情報は、飽くまで外面的なものであり、その本質は不明である。何が起こったのかを、判断するためには、発生した事象の本質を考察する、洞察力が重要である。

例えば、プレイヤーがバランスを崩し、転倒した場合、その原因が、本人のスリップによるものか、相手のファールによるものかを、洞察し、判断しなければならない。

また、事象の観察は、一方向からのみであり、その情報量も限定される。レフェリーは、その限られた情報から、本質を洞察し、判断しなければならない。

もちろん、洞察力を過信し過ぎると、先入観による判断をすることになり兼ねないので、十分に注意しなければならない。

さらに、より速やかに判断をするためには、予測が必要である。不測の事象が発生した場合には、反応が遅れるものである。目の前の事象に対し、その後の展開を予測することで、判断の選択肢を準備しておくことが重要である。

例えば、速攻の際に、ボールを保持したプレイヤーの直後を、防御プレイヤーが追走しているような場合、レフェリーは、反則が起こらない状況から、失格までを想定し、判断の準備をしておくことが必要である。

2）勇気

レフェリーには、瞬時の判断が求められる。そのためには、勇気が必要である。判定を下さなければならない事象が発生し、観察結果に洞察力を働かせたとしても、判断の選択肢を、完全に絞り込めるとは限らない。熟考する余裕はなく、様々なストレスの中で、瞬時に選択しなければならない。

勇気に欠けるレフェリーは、選択に迷い、判断を躊躇するため、瞬時に対応できない。その結果、プレイのスピードに付いていくことができない。

勇気を発揮するためには、経験や知識といった、レフェリーのパーソナリティも重要である。しかし、プレッシャーの中でのパフォーマンスが求められる、レフェリングそれ自体がスポーツである[5)]、という認識で、レフェリー自身もスポーツに参加するという、前向きに取り組む姿勢が欠かせない。

3）正当性

レフェリーの判断は、スピードが最優先される。また、レフェリーの事実判定は絶対的なものであり、ルールに反した判定でない限り、正当な抗議の対象とはならない。

しかし、正当性がまったく問われない訳ではない。誤った判定を繰り返すレフェリーは信頼を失い、対戦しているチームの理解・協力を得られなくなるため、試合をコントロールすることが困難になる。

判定の正当性を向上させるためには、判断する際、正しい選択肢が設定できなければならない。観察した事象からは矛盾した選択肢を、排除できるかどうかが重要である。

4）冷静さ

試合においてレフェリーは、様々なストレスの中で判断し、判定を下している。ゴール型球技であるハンドボールは身体接触が多発するため、エキサイティングな展開になり易く、対戦しているチームが冷静さを失うことは多々ある。しかし、レフェリーは、常に冷静であらねばならない。

レフェリーが、ストレスに負け、冷静さを失えば、客観的な判断が困難となり、正しい判定を下すことができなくなる。また、冷静さを失ったチームを、コントロールするためにも、レフェリーが冷静であらねばならない。

したがって、レフェリーは常に、自身の精神状態を客観的に評価できなければならない。特に、興奮しやすい気質を持ったレフェリーは、冷静でいるかどうかを常にチェックし、その状態を維持するための努力をしなければならない。

（4） 観　察
●アクション—リアクション
●分　担
●集　中

正しい判断をするために、最も重要なのは、観察である。レフェリーは、事象の観察から情報を入手し、それをもとに判断をしている。したがって、より正確な情報を、可能な限り詳細に入手することが、必要である。

しかし、視野に入れる事と、認知する事は異なる。例えば、プレイヤーが4歩ステップしたとき、見ただけでなく、それを認知しなければ判断することができない。「判断はできたが、笛を吹く勇気がなかった」と言うレフェリーは多いが、判断の前に、正確に認知できていない場合の方が多いと考える。観察とは、見て、さらに認知することである。

1）アクション—リアクション

観察の際、重要なのは、アクションとリアクションである。アクションとは、誰が何を行ったかであり、リアクションとは、その結果、どうなったかである。すなわち、原因と結果である。事象を観察する際、その因果関係を見極めなければならない。

プレイヤーがシュートを外した場合をリアクションと考えると、その原因、アクションは、以下の五つである。

①シューターのミス
②キーパーの美技
③ディフェンスの美技
④キーパーの反則
⑤ディフェンスの反則

これらの中で、7mスローに判定されるのは、④⑤キーパー・ディフェンスの反則の場合のみである。他のアクションで、7mスローの判定を下してはならない。

また、プレイヤーがバランスを失う原因は、自分自身の動作か、相手の行為によるものである。原因が、自分自身の動作であれば、それ自体がアクションであり、相手の行為であれば、リアクションでバランスを失ったと考えられる。

運動方程式によれば、$F = ma$、質量mの物体に力Fが働けば、必ず加速度aが発生する。外力によるリアクションと、自身によるアクションとでは、プレイヤーの動き方に、自ずと違いがある筈である。動きが、プレイヤー自身によるものなのか、外力によるものなのかを、見極めるためには、力学的な観察ができる知識も必要である。

2）分担

レフェリーが、発生した事象を、見落とさずに判断するためには、任務の分担が必要である。

一般的に、コートレフェリーはボールを中心とした観察を行い、ゴールレフェリーが、それ以外の、特にゴールエリア付近を中心に観察するとされている。ゴールレフェリーがボールの動きに目を奪われると、ボールに関係ないポジションでの反則が見逃され、試合の様相が荒れる原因となることもある。

しかし、任務の分担に関する、この原則は、各ペアーによって、決定されるべきものである。ペアーの経験等を基に、随時、修正を加え、見落としが、より少ないものにしなければならない。

例えば、チャージングの判定は、通常、コートレフェリーの分担である。しかし、ゴールエリアライン付近の場合、エリア内防御の可能性もあるので、判定の食い違いを避けるために、ゴールエリアライン付近の判定を、全てゴールレフェリーの分担とし、コートレフェリーは、サポートに徹するという方法もある。

3）集中

サッカーと異なり、ハンドボールでは同じプレイヤーに２枚目のイエローカードが出されることはない。警告に相当するプレイを繰り返し、２回目で退場になるのではなく、レフェリーは、プレイヤーに喚起を促すために警告を与え、プレイが改善されなければ、退場を与える。

したがって、レフェリーは、警告を与えたプレイヤーを、集中的に観察しなければならない。そのためには、警告を与えたプレイヤーを、記憶しておく必要がある。イエローカードを出した後に、番号を確認して、すでに警告を与えていることに気付き、退場に切り替えるようなことは、避けるべきである。

（５）
位置取り
●間合い
●角　度
●妨　害

良い観察をするためには、より良い位置取りをする必要がある。しかし、絶対的に正しい位置取りなど存在する筈はなく、レフェリーのパーソナリティ、対戦しているチームの戦術、プレイの質等によって異なる。したがって、レフェリーは常に、より良い位置取りを追求する努力を、怠ってはならない。

１）間合い

より良い位置取りの要素のひとつが、間合いである。詳細な観察のためには、可能な限り、近い間合いを取ることが必要である。遠い間合いでは、判断に必要な情報が、不十分であることが多く、判定に絶対的な自信を持つことが難しい。そのため、対戦しているチームの不信感を招くことが多い。プレイヤーは、近い間合いで下された判定には、素直に従うものである。

また、罰則を与える場合や、スローのポイントを正確に示す場合には、その位置へ速やかに立つ必要がある。そのためにも、近い間合いの位置取りは重要である。

２）角度

より良い位置取りの要素のもうひとつが、角度である。レフェリーによる事象の観察は、特定の角度、一方向からのみであり、角度の違いによって、得られる情報は異なる。

１対１の突破の場面において、両プレイヤーの真横から観察した場合、身体接触については、十分に情報を得ることができる。しかし、攻撃プレイヤーの進行方向に、突破をするために十分なスペースが、あるかどうかに関する情報は、十分ではない。

一方、攻撃プレイヤーの真後から観察した場合、突破のスペースについては、十分に情報を得ることができる。しかし、身体接触に関する情報は、十分ではない。

両方の情報を得るためには、攻撃プレイヤーの斜後方から観察する角度が最適である。しかし、ボールは常に移動しており、レフェリーが常時、この角度から観察することは不可能である。したがって、プレイの展開を予測しながら、位置取りをすることが必要である。

３）妨害

レフェリーは、より良い位置取りを求めて、常に移動しなければならないが、決して、プレイの妨害をしてはならない。

できるだけ近い間合いで観察することは重要であるが、プレイヤーの移動コースやパスコースに、決して入ってはならない。プレイヤーが移動した後の、スペースを活用したり、プレイヤーやボールの動きを、予測しながら近付くことが必要である。

（６）
動　き
●量
●質
・コース
・フットワーク

良い位置取りをするためには、より良い動きをする必要がある。絶対的に正しい位置取りが存在しない以上、レフェリーは常に、より良い位置取りを追求して動く必要があり、必要な位置に素早く移動できる動きができなければならない。

１）量

動きにおいて、最初に求められることは量である。特に、経験の浅い段階では、より良い位置取りを学ぶためにも、意識して動く必要がある。位置取りについて、あれこれ悩むよりも、先ず動くことが先決である。

２）質

動きの量について、課題を達成できれば、次は動きの質である。不必要な動きを減らすことで、より素早く必要な位置に移動することができ、体力の消耗を軽減することもできる。体力の温存は、質の維持のためにも、重要である。

当然のことながら、移動中も、観察は継続されなければならない。したがって、良い位置取りの連続を、繋げたものが、結果として、質の高い動きのコースとなる。

コートレフェリーからゴールレフェリーに戻る場合には、プレイヤーと走るコースが交差しないように、特に注意しなければならない。そのためには、可能な限り速やかに、サイドラインの外側へ出て、ライン沿いに戻ることが必要な場合もある。

観察の対象から、目を離さずに移動するためには、どの様な足捌き、すなわち、フットワークを用いるかは、重要な課題である。

プレイヤー程の俊敏な動きは必要ないが、急激な方向変換に対応し、視野を維持したまま、バランスを保たなければならない。

さらに、全体を通して、可能な限り、目線の上下動が少ないフットワークが求められる。

（７）
パーソナリティ
●スタミナ
●敏捷性
●経　験
●知　識
●信　頼
●印　象

レフェリングの各段階におけるパフォーマンスは、レフェリ

ーのパーソナリティによって、大きく左右される。

1）スタミナ

速いスタートの導入により、スピード化が促進し、運動量も増加しており、レフェリーにもスタミナが、より要求されるようになった。スタミナは、動きの量など、フィジカルな側面だけでなく、集中力の維持など、メンタルな側面においても重要である。

2）敏捷性

技術・戦術の発達にともない、多彩なプレイが展開されるようになった。新たな位置取りが必要となり、レフェリーも敏捷性が、より要求されるようになった。スタミナ同様、敏捷性も、事象に対する反応など、メンタル面においても重要である。

3）経験

レフェリーの有する経験は、パフォーマンスに大きな影響を及ぼす。レフェリングの各段階において、絶対的に正しい方法が存在することは希であり、対戦しているチームの戦術、プレイの質などの状況によって、正しい選択は異なる。したがって、状況によって、どのような選択をするべきかは、経験によって決定されることが多い。また、経験の積み重ねが、知識として蓄積されることにもなる。

4）知識

レフェリングの各段階において、様々な知識が必要とされる。ハンドボール観に関わる、歴史や技術・戦術・指導法等の知識、判断の基となるプレイの分析に関わる、力学・心理学等の科学的知識などである。

しかし、最も重要な知識は、ルールと解釈の知識である。起こった事象に対し、最も適切なルールを適用することが必要であり、判定の際には、ルールのどの条項を適用したのか、明確に説明できなければならない。ルールの丸暗記は無理としても、適用する条項のページを、瞬時に開くことができるように、把握しておきたいものである。

5）信頼

レフェリーが試合をコントロールするためには、対戦しているチームの協力が必要であり、そのためには、信頼を得ることが必要である。

例え、同じ事象に対して、同じ方法で、同じ判定を下したとしても、若手とベテランのレフェリーでは、対戦しているチームの反応が異なる場合がある。若手の場合には、不満気な態度を見せるのに対し、ベテランの場合には、素直に従うことさえある。これは、ベテランのレフェリーが長年の努力によって、培った信頼の賜である。

6）印象

パーソナリティにおいては、印象が最も重要である。日頃の言動・服装・立ち振舞いなどを含め、総合的に評価されるものであり、言わば、レフェリーの生き様である。

因みに、筆者が経験した世界選手権のレフェリー評価においても、「General Impression」（総合的印象）が最も高い配点となっていた。



優れたレフェリーには、優れたパーソナリティが不可欠である。

3. まとめ

審判技術の向上に寄与することを目標として、レフェリングのコンセプトを構築した。

レフェリーの任務としての、「判定」「表現」「判断」「観察」「位置取り」「動き」「パーソナリティ」の関係を明らかにし、筆者の国際審判員としての経験を加味し、詳細な説明を行った。

「判定」においては、一貫性と目標の重要性を説いた。

「表現」においては、笛、方向指示、ジェスチャー、協力、自信、コミュニケーションの重要性を説いた。

「判断」においては、洞察力、勇気、正当性、冷静の重要性を説いた。

「観察」においては、アクション・リアクション、分担、集中の重要性を説いた。

「位置取り」においては、間合い、角度、妨害の重要性を説いた。

「動き」においては、量と質について説いた。

「パーソナリティ」においては、スタミナ、敏捷性、経験、知識、信頼、印象の重要性を説いた。

4. 文献

1）広瀬一郎（2005）スポーツマンシップを考える．小学館：東京．

2）ジョン・W・バン：栗本義彦訳（1969）スポーツ審判の技術．ベースボール・マガジン社：東京．〈John W. Bunn(1957) THE ART OF OFFICIATING SPORTS.PRENTICE-HALL, INC〉

3）松 喜美夫ほか（2002）ハンドボールにおけるポストプレイのステップに関する研究．函館大学論究，33：pp. 41-52.

4）佐々木吉蔵ほか（1977）新版スポーツ審判ハンドブック，大修館書店：東京．

5）清水宣雄（1997）ハンドボール審判員：レフェリングはスポーツである．バイオメカニクス研究，1－1：pp. 102-104.

6）清水宣雄ほか（2002）ハンドボールにおける基本プレイ・アルゴリズムの構築に関する研究，2対2の局面における突破について．茨城大学教育実践研究，21：pp. 97-112.

7) 清水宣雄ほか（2004）ハンドボールにおける基本プレイ・アルゴリズムの構築に関する研究，ゴールキーパーとシューターの駆け引きについて．ハンドボール研究，6：pp. 75-79.



6カ月間洗浄がいらない PREMIUM ドクター・水素水®

多くのアスリートや
スポーツ愛好家の
方々にも愛飲されて
います。





健康は毎日の飲料水から

**水道水から作れるので
1日わずか25円と
とても経済的です。**

水素(H2)と有害な活性酸素の働き

体内の有害な活性酸素の蓄積は、環境、タバコ、酒、ストレス、紫外線などが原因の一つであると言われています。水素(H2)はこの有害な活性酸素と反応し、水(H_2O)になり、お体を健康へと導いてくれます。
1日1.5ℓ～2.0ℓの水素水を何回かに分けて飲用する事が大事なポイントです。

※日本国特許第4252434号
※アメリカ合衆国特許番号：USP 7,189,330
※中国特許登録：ZL 2005 1 0068852.5
※韓国特許登録：529006号
※国際特許申請中

6ヶ月間 1ヶ月に一度の穀物酢洗浄なし
従来品より原材料が1.5倍
水素量が30%up

経過日数	溶存水素濃度（ppm） プレミアムスティック	従来スティック
1日	1.43	1.04
1カ月	0.76	0.71
2カ月	0.79	0.62
3カ月	0.82	0.56
4カ月	0.86	0.42
5カ月	0.88	0.29
6カ月	0.80	0.23

試験条件：
1本／500ml PETボトル
溶存水素濃度計測後
毎日全量水交換

計測機器：
エイブル株式会社製
溶存水素濃度計　DHS-001

ドクター・水素水 PREMIUM



ドクター・水素水 PREMIUM
1箱3本入り
メーカー希望小売価格
6ヶ月タイプ　13,440円(税込み)

www.dr-suisosui.com

株式会社 FDR・フレンディア
〒150-0041 東京都渋谷区神南1-9-2 大畠ビル5F 502号
Tel:03-5728-0132 Fax:03-5728-0138

フリーダイヤル 0120-372-132（みんなに いーみず）

水素についてもっと詳しくお知りになりたい方は下記のサイトをご覧下さい。
各大学機関が各学会誌に論文を発表しております。
www.aboutsuisosui.com

日本協会は75歳になります。

日本協会創立75周年記念誌委員会

日本ハンドボール協会は、1938（昭和13）年2月2日、日本陸上競技連盟より独立し、創立されました。以来、幾多の歴史を重ね、2013年に満75年の節目を迎えます。この節目の年に、今までの歴史を纏め、今後の発展の礎にするために、日本ハンドボール協会創立75周年記念誌を作成することになりました。そこで、本年度4月に日本ハンドボール協会創立75周年記念誌委員会が設置され、委員10名で活動を開始しました。

日本協会では、過去に50年の節目として「日本ハンドボール史」を纏めています。さらに60周年の節目に、日本ハンドボール史を引き継ぐものとして、「創立60周年記念誌」を纏めています。今回は、これらを引き継ぎ、日本ハンドボール協会史として編纂していくことが了解されています。

日本協会の現在は、過去の事業の結果として存在しています。また、現在の事業は、将来に結果として現れてきます。このような観点から、過去の記録を整理し、評価することは、将来の発展に貴重な資料となるでしょう。また、先達の輝かしい成果を保存することは、ハンドボール界の貴重な財産となっていくことでしょう。

また、歴史は、新しい事実の発見や、その時代に合った評価がなされることにより、評価が変わったり、新しい指針を発見することもあります。このような観点から、50年史、60周年記念誌以降の研究などを参考にしながら、正確な歴史の流れを記録していきたいと考えています。

日本協会創立から75年を経たことは、それだけ歴史を知る証人が少なくなることです。次に年誌が纏められるのが、日本ハンドボール協会100年とすれば、その時には、草創期の証人はほとんどいないでしょう。今残しておかなければ、永久に失われてしまうことになります。

60周年記念誌作成時に出て来た、50年史の記録の不確実性を正すことも視野に入れて行きたいと考えています。具体的には、全日本総合の優勝メンバーの記録ミスがあることを指摘されています。

これから、全体構想の確定、資料集めを進めていかなくてはなりません。そこでハンドボール界の皆様にご協力を戴きたいと願っています。以下の資料・写真等をお持ちの方は、編集委員会にお貸し戴ければ、よりよい記念誌が編集できると思います。

ご協力よろしくお願いいたします。

○各都道府県協会の周年記念誌など
○各チーム（実業団、大学、高校など）の記念誌など
○過去の全日本大会のプログラム等
○重大な歴史的事実を示す写真・資料等

［全体構想］
発行予定：2013（平成25）年2月2日
■歴史編
1．祝辞
2．ハンドボール年表
3．日本協会各年度の動き
4．75周年記念企画
5．都道府県協会の歩み
6．日本リーグの歩み
7．全国連盟・団体の歩み
■記録編
1．国内大会
2．国際大会
3．名簿編
4．規約・ハンドボール研究等

審判部報告

千葉国体を吹笛して

田中啓輔（千葉県立流山おおたかの森高等学校）　大塚清彦（千葉県ハンドボール協会）

「今　房総の風となり　この一瞬に輝きを」をスローガンに、第65回国民体育大会「ゆめ半島千葉国体」が千葉県市川市・香取市を会場として、9月30日から10月4日まで開催されました。今大会は、私たちにとって地元・千葉での開催ということもあり、大きな喜びと緊張を胸に吹笛しました。

私たちは昨年2月より本格的にペアを組み、各種ブロック大会・全国大会（千葉ジャパンオープン・新潟国体）とチャンスをいただいてきました。そして今大会では、これまでの各大会で学んだことを残らず出し切る思いで臨みました。

大会前日の審判会議を始めとして、大会期間中毎朝開かれる審判会議・会場毎の反省会・夕食後の研修会と、まさにハンドボール漬けの毎日でした。その中で、植村審判長の「審判団はひとつのチームである」「試合最後の5分を大切に」という言葉が強く印象に残っています。

私たちは少年女子3試合、成年女子1試合を担当しました。どの試合においても、両チームの良さが十分に発揮されるよう最善を尽くしましたが、試合が終わる度に力の無さを痛感しました。その度に審判団の「チームメート」から大きな財産となる言葉を沢山いただきました。それを血肉とし、次のチャンスに活かすことがその御恩返しになると信じ、努力していきたいと思っています。

今大会は、両市の担当者、競技役員、補助員の生徒たち等々、至るところで「普段からの知り合い」にお世話になりました。また、ボランティアの方々の明るい笑顔で疲れが吹き飛びました。そして、私たちはみなさんの助けのお蔭で吹笛できるのだということを改めて強く感じました。この場をお借りして御礼申し上げます。

最後になりますが、越田審判審査指導委員長、植村審判長、中山副審判長、仲田副審判長、審判団の皆さんをはじめ、すべての大会関係者に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

スコアールーム 第65回国民体育大会

開催期日：９月30日(木)～10月４日(月)
会　場：千葉県・市川市国府台市民体育館ほか

【成年男子】

▼１回戦

広島県 45（22－10、23－13）23 香川県
茨城県 33（15－11、18－13）24 大分県
岩手県 28（14－12、14－10）22 京都府
埼玉県 33（17－13、16－13）26 三重県
佐賀県 50（25－９、25－10）19 秋田県
千葉県 38（17－９、21－11）20 北海道
福井県 28（16－16、12－９）25 群馬県
愛知県 44（16－11、28－12）23 奈良県

▼２回戦

広島県 39（25－13、14－５）18 茨城県
埼玉県 55（29－11、26－16）27 岩手県
佐賀県 37（18－７、19－14）21 千葉県
愛知県 33（16－７、17－17）24 福井県

▼準決勝

埼玉県 36（15－17、21－15）32 広島県
愛知県 26（12－９、14－11）20 佐賀県

▼３位決定戦

佐賀県 28（11－12、17－13）25 広島県

▼決勝戦

愛知県 30（15－15、15－14）29 埼玉県

【成年女子】

▼１回戦

三重県 40（22－12、18－７）19 宮城県
沖縄県 24（12－10、12－10）20 岩手県
香川県 57（27－１、30－３）４ 北海道

▼２回戦

熊本県 36（19－８、17－16）24 三重県
京都府 26（12－12、14－11）23 神奈川県
東京都 36（14－14、22－11）25 福岡県
石川県 34（18－７、16－８）15 山口県
茨城県 34（16－７、18－８）15 沖縄県
大阪府 29（13－10、16－14）24 岐阜県
千葉県 25（11－５、14－６）11 福井県
広島県 27（12－14、15－５）19 香川県

▼準々決勝

熊本県 33（16－７、17－７）14 京都府
石川県 32（21－６、11－12）18 東京都
大阪府 28（14－９、14－11）20 茨城県
広島県 36（19－６、17－９）15 千葉県

▼準決勝

熊本県 20（８－８、８－８）18 石川県
（２－１　延長　２－１）
広島県 27（13－７、14－14）21 大阪府

▼３位決定戦

石川県 31（19－13、12－12）25 大阪府

▼決勝戦

熊本県 19（10－10、９－８）18 広島県

【少年男子】

▼１回戦

埼玉県 27（13－12、14－11）23 岡山県
熊本県 48（21－10、27－９）19 北海道
香川県 26（14－４、12－11）15 福島県

▼２回戦

福井県 31（15－10、16－15）25 埼玉県
愛知県 38（19－17、19－13）30 大阪府
山口県 30（16－14、14－14）28 熊本県
神奈川県 33（17－13、16－18）31 京都府
千葉県 34（18－11、16－14）25 岐阜県
香川県 30（13－15、13－11）29 長崎県
（１－２　延長　３－１）
大分県 28（11－７、17－10）17 茨城県
岩手県 37（13－13、24－11）24 群馬県

▼準々決勝

福井県 36（18－14、18－18）32 愛知県
大分県 28（10－12、18－14）26 岩手県
山口県 30（15－12、15－13）25 神奈川県
香川県 36（13－10、23－10）20 千葉県

▼準決勝

福井県 32（17－16、15－14）30 大分県
山口県 31（19－11、12－11）22 香川県

▼３位決定戦

香川県 31（16－12、15－11）23 大分県

▼決勝戦

山口県 36（15－９、21－16）25 福井県

【少年女子】

▼１回戦

京都府 31（15－８、16－13）21 秋田県
千葉県 29（16－８、13－７）15 北海道
岐阜県 30（14－８、16－８）16 山梨県
山口県 34（17－６、17－９）15 鹿児島県
東京都 28（12－11、16－９）20 宮城県
愛知県 23（12－12、11－10）22 石川県
香川県 23（８－14、15－８）22 埼玉県
大阪府 26（11－７、15－９）16 沖縄県

▼２回戦

京都府 22（13－12、９－７）19 千葉県
山口県 26（14－10、12－12）22 岐阜県
愛知県 26（９－９、17－10）19 東京都
大阪府 19（12－７、７－10）17 香川県

▼準決勝

京都府 31（15－９、16－11）20 山口県
愛知県 25（８－10、11－９）24 大阪府
（２－０　延長　０－２）
（４　7mTC　３）

▼３位決定戦

大阪府 25（15－14、10－８）22 山口県

▼決勝戦

愛知県 28（13－９、15－８）17 京都府

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」10月入会・継続会員

【茨　城】野村　正志　【東　京】東尾　吉信、山田　育代、荒川　晶夫、三宅　杏奈　【神奈川】白井　章　【富　山】若松　路夫　【静　岡】細澤　覚　【愛　知】坪井　夕香、山本　智子　【大　阪】布目　明子　西端　美重子、中塚　冨佐子、小藪　律子　【広　島】木下　しのぶ、塩屋　正子

【12月・1月の行事予定】

【会　議】
12月11日(土)　常務理事会（東京）
1月8日(土)　常務理事会（東京）

【大　会】
12月22日(水)～26日(日)（東京都・駒沢）
　第62回全日本総合選手権大会（男子）
12月25日(土)～28日(火)（愛知県・名古屋市）
　第19回JOCジュニアオリンピックカップ
1月13日(木)～30日(日)
　第22回男子世界選手権（スウェーデン）
1月19日(水)～22日(土)（広島市）
　第62回全日本総合選手権大会（女子）

機関誌ホームページ掲載に伴う執筆者承諾について（お願い）

日本協会機関誌は1960年6月1日第1号が創刊され、昨年2009年5月に500号記念号を発行することができました。これもひとえに読者の皆様、執筆者の皆様のご協力の賜物と厚くお礼申しあげます。

この500号を記念し、バックナンバー（1号～500号）を全て電子ファイル（PDF）といたしました。機関誌の貴重な記事、データをより多くの皆様にご覧いただけるように、日本協会ホームページに掲載したいと存じます。

つきましては、執筆者の皆様にお願いでございますが、ホームページ上に機関誌を掲載することをご了解戴きたく存じます。もし、掲載を希望されない場合には、下記日本協会事務局までご一報戴ければと存じます。なお、ホームページ掲載は2011年4月を予定しています。今後、発行されます機関誌も、同様にPDFにてホームページに掲載いたしますので、ご了承の程、宜しくお願い申し上げます。

連絡先：日本ハンドボール協会事務局　広報担当
〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
TEL：03-3481-2361
FAX：03-3481-2367
E-Mail：handball@japan-sports.or.jp

HANDBALL CONTENTS Dec.

（登録チームの購読料は登録料に含む）